

寶島台灣



1919年出版

編者 辜早天

前書き

バオダオ（宝島）とは台湾の別称であり、その台湾と日本ばかりでなく、今中国武漢で発生した新型コロナウイルスが猛威をふるって世界中に被害が拡散しています。17年前に起きたSARSのことを思い出させます。台湾では学校の春節休みが二週間延期されたのを機に余暇ができたので、2004年に発刊した「宝島台湾」が未完全な校正で誤字の個所が多く今回改定版として電子書籍化することにしました、本書は大きな3つのテーマから成り立っており、下記の通りの内容を載せてあります。

◆我ら台湾大好き哈台族

第一章「メルマガ遥かなり台湾」

2002年8月より週一回の割合でメルマガ記事を配信。過去に配信してきた記事の中でも昨今の武漢肺炎と対比される当時のSARS記事や、是非読者のみなさんに知らせておきたいものなどを本書に掲載しました。

第二章 サラリーマン氏の台湾旅行記

筆者の堀江さんは、メルマガの読者でこれまで20数回にわたる台湾旅行の色々な思い出などを寄せてくれた中から数編を選んで紹介してみました。

第三章 私と台湾

ここでは編著者に協力して台湾のことを綴ってくれた方々のコーナーです。筆者それぞれの台湾に対する思いが込められています。

◆ 湾生と日本語人

第四章 日本語人は語る

筆者は台中会の会員で戦前日本教育を受けられた方で、自分史を書き綴ってくれました。文中で日本政府が、戦後、日本が台湾人に対してとった態度に対して痛烈な叫び声を私達日本人は真剣に受け止めるべきだと思います。

そして今は高山茶と呼ばれている烏龍茶の審査委員長でもあった筆者は、日本の烏龍茶愛好者のために、講演した内容を特別に寄稿してくれました。

第五章 日台双方のラホヤーの同窓会

ラホヤーとは台湾語でお年寄りのことです。台湾で生まれ育った日本人は「湾生」と呼ばれていますが、ラホヤーとなった今も故郷台湾に対する思いは格別でとくに戦前台中州出身の人たちは台中会と称し、毎年一回同窓の友が集まり結束を固めていました。仲間に呼び掛ける誘いの言葉に多くの友が参加したのです。

次の日本語人の同窓会の話は戦後派の人たちにとっては想像できないようです。

そして最後の告別式の話は、日本教育を受けた台湾の人たちも日本人恩師の葬儀に際し、恩師に呼び掛ける弔辞は聞いている人の肺腑をえぐる素晴らしい、挨拶でした。葬儀はすべて日本語で行われ日本人の参加者はど肝をつぶし、深く感銘したと語っていました。参列した第三高女の人たちはすでにあの世に旅立ってしまいましたが、きっとあの世で同窓会を開いていることでしょう。

この章を読めば、また「日本時代の教育のあり方はどうだったのか、戦後教育の欠けているものは何か」がわかりそうな気がします。

◆後藤新平と八田與一

第六章 日本人のしたこと

(1) 後藤新平は第4代台湾総督児玉源太郎を補佐する民政長官として、1898(明治31)年から8年間にわたって、台湾の近代化に努めた。当時、台湾の人々の間に広まっていたアヘン吸引の禁止や、鉄道・港湾など都市インフラの整備、製糖産業の育成など、矢継ぎ早に近代化政策を実行した後藤は、今でも台湾で多くの人にその名を知られる日本人の一人なのです。

(2) 民間人の八田與一も台湾の歴史教科書に載っており、台湾の学生にもよく知られています。けれど李前総統が紹介するまでは日本人で知っている人はほとんどいませんでした。幻の講演となったものが新聞で掲載されて大きな反響を呼び起こし、八田技師と日本人の精神が脚光を浴びるようになったのです。

最後に、本書が読者の皆様の台湾理解の一助としてお役にたてれば幸いです。

編著者 喜早天海

2020年2月20日

2003/5/13

連日SARSの話題で持ちきりですが、台湾（台北）ではこれ以上の感染を防ぐためにバス、タクシーの運転手にマスクの着用を義務つけるとともに、鉄道や台北捷運（MRT）の利用客に対してもマスクの着用が義務づけられました。メーカーでは急激なマスクの需要に生産が追いつけなくて、ある下着メーカーでは、この時とばかり、ブラジャー1つからマスクが2つできるとしマスクへの転用生産をはじめた所もあります。また一般市民の中にも、マスクが手に入らないならと言うのならとばかり、食堂の使い捨てお椀を利用して作ったマスクをしている人も出てきています。マスク業界ばかりでなく、SARSの経済効果は清潔用品業界をも波及しています。これといった予防ワクチンがない状況下で誰もが手洗い、うがい、住まいなどの周りの消毒を励行するようになったからです。

SARS対策に「抗菌作用がある××商品がいい」とか、「××がいいよ」

とか情報が流れると、その商品はまたたくまに店頭では品不足になってしまうのです。

でも、SARSのおかげで、衛生清潔面に気をつけるようになったばかりで

なく、これまで母子家庭のごとく晩御飯をたべていた家庭が一家団欒の日々になったとか、夜遊びしないようになったので早寝早起きの習慣になってきたとか結構プラス面が生じてきているんですよ。

■先月の産経新聞読者投稿ページの「アピール欄」で興味深い投稿がありました

た。台北駐大阪経済文化弁事処の処長（総領事に相当）羅坤燦氏が投稿された記事です。

皆さんにも是非考えていただきたく、ご覧になった方もいるかと思いますが敢えて全文掲載します。

【アピール】SARS猛威の陰で忘れられた台湾

(4/15 産経新聞朝刊)

今、新型肺炎（重症急性呼吸器症候群＝SARS、サーズ）が世界中で猛威をふるっている。既に二千六百人以上の感染者を出し、死者数も百人を超えるという。

なんということであろうか。病例が発覚したが、ひたすら隠し通し、SARSの感染を世界中に広めてしまったにもかかわらず、ろくに非難もされなかった中国。そして病例が発覚した時点で即時、世界保健機関（WHO）に通報したが、メンバー国でないがため無視され、調査団でさえアメリカのCDC（疫病管制センター）を通じてようやく派遣されたという扱いを受けた台湾。この雲泥ともいえる差は、いったいどこから来ているのだろうか。

台湾はいち早く「防疫監視システム」を発動させ、感染症の拡散を最小限に抑え、死者を出すことなく完全にコントロールすることができた。いわば疫病防止の模範国である。こういった実績があるにもかかわらず、WHOの専門家会議には出席すらできない。その理由は言わずとも、中国からの政治的圧力によるものにほかならない。果たしてこのような不条理極まりないことが、まかり通ることを国際社会は見過ごしていいのであろうか。

台湾は特に衛生保健面において無料で児童にB型肝炎ワクチンの接種を提供し、エイズの予防治療において有効的な追跡管理システムを打ち立てるなど、積極的に国際貢献に取り組んでいる。

WHOは世界すべての人々が享受できる衛生保健レベルの向上を一番の目的としている。その枠組みから台湾が除外されていることは、いかなる理由をもっても正当化することはできない。台湾は1997年からWHO加入案を推進してきたが、実に連続六年間蚊帳の外におかれてきた。今年も5月19日にジュネーブで開かれるWHO総会において「衛生実体」という名目で「観察員」として加入案を再トライするつもりである。目下、アメリカ、カナダ、欧州などの議会において、すでに台湾のWHO加盟案を支持する決議案が採択されている。

国際社会はSARSが猛威をふるう今日においてこそ、台湾を国際衛生保健の枠組みに取り入れることを厳粛に見つめ直し、受け入れなければならないのではないか。

日本語人の住む宝島

「台湾万葉集」をご存知でしょうか。ぼくはある雑誌を見て知って、早速本屋
に行って、この本を捜し求めたのです。すると、しばらくしてNHKで「台湾万葉集」の特集番
組

が放送されたのです。1時間半にわたる番組でしたが、「日本人とは何か」とつくづく考えさせ
られたのです。番組の中で強烈な印象を与えたのは、蕭翔文先生の短歌でした。

「日本人になり切らんとして なり切れぬ 苦しみ重ね 戦ひ終えぬ」
先生はこう言っているのです。

「わたしたちは、自分の気持ちを表すのに文章よりも、歌を詠んだ方が簡潔に
しかも深い心の表現ができるのです。」と。

その蕭先生は自分の娘さんの結婚披露宴の時に

「現在を 把握して来し 積み重ね
新しき今日 迎ふを祝う」

と短歌を詠んで、彼女の前途を祝福したのです。

すると、娘さんは即座にその場で父親に歌を返したのです。

「新しき 今日を迎う 我を支えし 父の大きな手
母のやさしき手」

この時の先生は感激して涙を浮かべていました。

しかし、この番組を見た日本人も同様に感動したと思います。ぼくは、この
シーンを見て、本当に感動しました。

日本人でさえ、短歌の詠める人は少ないのに、この人たちは日本人以上に
日本人ではないかと思ったのです。

「台湾万葉集」の序文で大岡信氏は下記のようにしたためています。

「私は呉建堂氏の語る日本語の完璧な安らかさ、神経の隅々まで一分の隙も
なく日本語人である呉先生の立ち居振舞いの見事さに感服した。私は今、日本語人という
耳慣れない言葉を書きつけた。ある人が日本人である最大の理由は民族的、人種的な特性に
よるよりも、その人が日本語を恒常的に語り、あるいは書くことができる点にある、
というのが私の考えなので、呉建堂さんにも、日本人というのには憚りがあるだろう
から）日本語人という称号をお贈りしたいと思ったのである」

ぼくは、この序文で使われた「日本語人」という言葉がすっかり気に入り
ました。「日本語人」とは日本語を話すだけでなく、書き表わすことのできる人たちなんです。

また、台北にはこのような日本語人の人たちが美しい日本語を台湾に残そう
という趣旨で活動を行っている団体があります。1992年に結成された「友愛グループ」です。
NHKの「アジア WHO 'S WHO」で紹介されたこともあり、今では若い人も増え
メンバーが100名を越し、最近では日本人の参加者も目立っています。毎月一回

月例会をやっていて、日本語の研鑽をしているのです。渡されたプリントの問題に全問答えられる日本人はまずいません。「乳婆（おんば）日傘で人となる」とか「にわか分限者（ぶげんしゃ）」などどんな意味か知っていますか。「そんな日本語聞いたことも見たこともないよ。」と言う日本人を尻目に、彼らはその意味を説明し、「中国語や台湾語では何と言うか。」を討論しているのです。

彼らの日本語のレベルの高さにすっかりど胆を抜かれて帰る日本人も多いと聞かされていましたが、実際参加してみてそのことが実感させられました。もし皆さんも興味があれば是非参加してみてください。

そして台中にも「中央日本語演説会」というグループがあります。台湾の人たちが外国語である日本語によるスピーチをしているのです。日本人でありながら日本語のスピーチができない人はたくさんいるのに、彼らは間違いを恐れることなく堂々と前に立って話しているのです。もちろん多くの台湾人の中でこのように出来る人は比率からすれば、ほんの僅かでしょうが、日本人で台湾語や中国語でスピーチのできる人は果たして何人いるのでしょうか。また日本にはこのようなグループがあるのでしょうか。

台湾に住み始めたころ、日本語でしゃべって中国語で答え、中国語をしゃべって台湾語で応答する人たちを目のあたりに見てビックリさせられました。台湾は世界中から一国家として認めてもらえない国ですが、台湾には、このような人たちや日本大好きな若者（哈日族）、日本語人などが暮らし、日本、日本人、日本語と密接にかかわりあっている所なのです。

2003/8/15

(プロローグ)

「先生、こんなものが父の遺品の中から出てきましたよ。」
あれは、今から8年前のことです。当時、日本語教師として台中市内にある
静宜大学推廣センターでの公務員を対象とした日本語クラスを受け持っていました。
そのクラスの中に楊さんという還暦を迎えた学生さんがいました。楊さんは
小学校3年まで日本教育を受けていたそうです。その楊さんが、ある日変色しかけた封筒を持って
冒頭のように話し掛けて来たのです。見ると差出人は日本人で「廣江清」と書いてありました。
「先生、私のお父さんの先生は日本人だったよ。読んでみて。」と言われた
ので、便箋を開くと次のようなことがしたためてありました。

20年ぶりに、空の上から淡水河の大きな流れを見た時、とうとう帰って来
たという感じでした。二つの時から育った台湾、40年近く住みなれた台湾、私は思わず目頭が
熱くなりました。
「とうとう帰って来た私の故郷に」

この感じは1月30日車の上から守城大山のふもとにひろがっている埔里の
盆地を見渡した時、もう一度しみじみと感じたことでした。中学時代、帰
省のたびに通った裏南投道路を走って盆地に入ると、子供の時に魚取りに興じた河、見慣れた
草や木、精糖会社の煙突、何一つなつかしくないものはありませんでした。

そして、孔子廟での感激の再会、ひとりひとり握った手には熱い思い出が
こもっていました。盛大な歓迎会、連日の同窓会、温かい故郷の人々の深いお志に、毎日私は
泣かされました。時が経っても、国が変わっても、人の心と心のふれあいには、切っても切れ
ないもののあることを思い知らされました。11日間の埔里での滞在、それは私の第一の故郷で
の楽しいひとときでした。霧社・水社・北山坑・烏牛欄での心温まる歓迎の集い、水源地への
遠足、私の一生にとっていちばん楽しい時を過ごさせていただいて、ほんとうにうれしいこと
でした。

それから、台中・豊原・員林・南部地方・台北での二週間にわたっての旅
行では、思い出深いたくさんの人に会い、厚いおもてなしをうけて、また感激を新しくしま
した。皆様の温かい心と、暖かい自然に取り囲まれての25日間の生活に、でき
ることならこのまま台湾に住みつきたいとさえ思いました。

しかし、それは許されないこと。皆様の愛情の綱をふりきるように、22日
私の乗った翠華号は、松山の空を飛び立ちました。私は再びみることができかどうかわから
ない台湾の山々を下に見ながら「故郷よ、さようなら。みなさん、さようなら。」と心の中で
叫びながら、じっと目をとじました。ほんとうにありがとうございました。』

2月22日

楊 霧 様

この手紙を読んで、感動で胸がいっぱいになりました。廣江先生はかつての教え子から招待を受け戦後20年を経て里帰りしたのでしょうか。教育のあり方や日台関係が問われている現在、私たちはこの手紙から学ぶべき点があると思い、全文そのままを紹介させていただきました。廣江先生が今なお健在であれば90歳を過ぎているはずです。お住まいは高知市とのこと、どなたかご消息をご存知の方は著者あてにご一報くだされば幸甚です。

(台湾見聞録P116より)

※学生の楊さんから別に頼まれたわけではありませんでしたが、末尾に

「廣江先生の消息」を問いかけたのは、次の理由からです。

それは先生がまだ健在であれば本人に、もし叶わなければ遺族の方に「台湾見聞録」の本を差し上げたかったからです。恩師からの一通の手紙を最後まで大事に保存していた楊さんのお父さん、そしてそれが楊さんからぼくにリレーされてきたので、今度はこちらから廣江先生とお返したかったのです。終戦後の台湾の様子を知らせようとして。

さて、末尾に先生の記事を読者の皆さんに呼びかけると同時に、差出人住所のところに手紙を出したのですが、全然音沙汰なく、あきらめかけていました。すると、「見聞録」を発行した翌年（1999年）夏のある日姉から連絡が入ったのです。

「捜し求めていた廣江先生の記事がわかったわよ。息子さんから手紙がきたのよ。」
（注：手紙は姉に依頼して出してもらったので、連絡先は姉の所にしていました）
「なんて書いてあった。」

「息子さん夫婦はね。お父さんの住んでいた家と同じ市内に住んでいて、お父さんはすでに亡くなっていて、そのお家には誰も住んでいないんだって。先日お父さんの法事が近々あるのでその空家に行ったらね。偶然郵便受けにある手紙を読んであなたの本のことを知ったという訳なのよ。それで、その本を送ってもらいたいって書いてあるわよ。」

「いいよ。」

「じゃ、何冊送ればいいのか？」

「そうだなあ。一冊では少ないし、十冊じゃ多すぎるし、五冊送ったら？」

すると、数日後、姉から興奮気味の電話が入ったのです。

「この前あなたから頼まれて送った本が届いたんだって。何でも先生の命日の日に、しかも先生の子供さん達5人集まって法事をしている時に、人数分の本が届き驚いたって言ってたわ。」

この話を聞いてボクもビックリ仰天！廣江先生の命日がいつかも知らず、かつ先生のご息子さんたちが何人いるか知る由もなく、ただ適当な数量を姉に言って頼んだだけなのに。こんな事ってありえる？本当に不思議な因縁を覚えずにはいられませんでした。

姉からの吉報の電話が入ってしばらくした後、廣江先生のご息の方から次のようなご丁寧な礼状が寄せられたのです。

「はじめまして。過日は大変ご立派なご本を恵贈賜わり有難うございました。まずは御礼を申し上げます。（中略）

父は生前台湾から手紙が届きますと、よく私のところへ持ってきてまして、

『どうだ、立派なものだろう。今の若い人には、こんな手紙は書けないよ。』

と教え子の皆さんの自慢をしておりました。

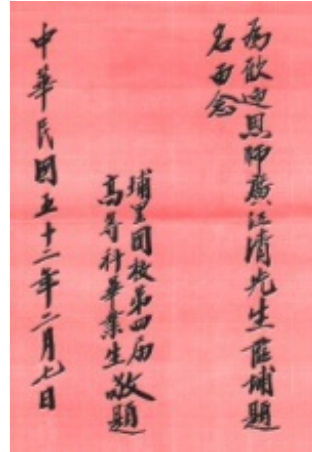
ほんとうに、立派な、正しい日本語の書簡文で、感心して読ませて頂いたものでした。

（中略）

ご本は奥秋様（注：ぼくの姉のこと）から5冊お送りいただきましたが、奇しくも、父の命日に、7月17日に宅配便届けられて、なにか因縁のようなものを感じ、感無量なものでありました。早速、父の霊前に供えさせていただきました。又、兄弟5人なので、7回忌の法事に帰っておりました兄弟たちに一冊ずつ渡しましたところ大変感動して、皆読みふけておりました。

このような機会を作ってくださいました奥秋様、喜早様、楊様、皆様に改めて御礼を申し上げます。

先日来、父の遺品をさがしていましたところ、台湾の皆さまにご招待頂きました折に集まって下さった方々の名簿が出て参りました。1ページにお一人ずつのお名前がかかっている立派なもので、ご参考までに、複写して同封させていただきました。(中略)
父と台湾の方々の交流の一端と思い、同封いたしました。(後略)」



(エピローグ) そのご子息の廣江満さんとは、いまだに対面していませんが、快く私達台中会に参加いただき、かつ今ではメールや年賀状のやりとりする間柄になりました。まさに「台湾見聞録」が縁結びの役割を果たしてくれたのです。

2月、3月は日本では卒業式のシーズンで、「仰げば尊し」と「蛍の光」の歌は卒業式の定番の歌になっていました。

(注：台湾では新学期は9月からなので夏休みの前の6月が卒業の時期です。)

でも、台湾ではいまなお学校によっては卒業式に--「仰げば尊し」は「卒業歌」(卒業は卒業の意味)として、「蛍の光」は「驪歌」(りか)と題され---歌われているのです。中国語の歌詞で聞くこれらの歌はなかなかグーですよ。

以前、台中会(台日交流グループ)の会合で、台湾の人たちから「中国語」でこの2曲を歌ってもらったらとても気に入ってアンコールしてまた歌ってもらったのです。日本と台湾が同じ曲を歌っていたなんて思いも寄らなかったでしょう?本当に台湾と日本とは密接な関係があるんですね。

台湾の人たちは「蛍の光」の曲を聞くと「悲しくなって涙が出てくる。」と言う人が少なくありません。その人たちにとって、この曲は単に卒業式の時の歌ではないのです。ぼくは、「蛍の光」と言えば、卒業式に歌われる歌だとばかり思っていました。でも、ここ台湾では学校だけでなく、葬式の時も別れの曲として「星影のワルツ」などと共にこの曲が演奏されるのです。だから、この曲を聴いて涙が出てくるのは、失った肉親に最後の別れを告げた告別式の時のことを真っ先に思い起こしたからなのです。よく考えてみると、人生における卒業ですからこの歌を演奏しても不思議じゃないですよ。

ところで、この「蛍の光」に4番までの歌詞があったのを知っていますか。

四番が「台湾のはても樺太も」となっていたのです。しかし昭和20年8月の終戦により、その講和条約で台湾及び樺太・千島領有を放棄し、三番と四番は歌われなくなったのです。では、その歌われなくなった部分を含めた全部の歌詞を紹介しましょう。

【歌詞】

1) 蛍の光 窓の雪

書(ふみ)読む月日 重ねつつ

いつしか年も すぎの戸を

開けてぞ今朝(けさ)は 別れゆく

2) とまるも行くも 限りとて

互(かた)みに思う 千万(よろづ)の

心のはしを ひとことに

幸(さき)くとばかり 歌うなり

3) 筑紫(つくし)のきわみ 陸(みち)の奥

海山遠く へだつとも

その真心は へだてなく

ひとえに尽くせ 国のため

4) 台湾のはても 樺太も
八洲（やしま）のうちの まもりなり
いたらん国に いさおしく
つとめよわがせ 恙（つつ）がなく

卒業式と言えば日本と違う点は台湾の卒業式は暗いイメージがなく、「明るい」という言葉がピッタリ。以前商業高校で日本語を教えていた時、卒業式の日 教え子が言った言葉がいまも強烈に残っています。

「先生、有難うございました。（私たち今日で卒業だから）もう日本語使う機会がないので先生に日本語全部返しますよ。」

◆その言葉がいつまでも残っていて「いままで一生懸命日本語を勉強しても、（これまで勉強に費やしたお金や時間や努力を）途中で放棄するのはもったいないじゃないの」と日本語の学生さん（社会人）に呼びかけ、日本語を話す機会、日本語を話す相手を提供するからと、言って「日本語聯誼会（台中会の前身）」を結成したのです。

読者の皆さんの多くは「何日君再来」の歌を知っている人が多いと思いますが、それは日本語で歌われているものですか？それとも中国語でしょうか？ぼくは台湾に住み始めてしばらくしてテレサテンのテープでこの歌を知りました。でも中に入っている歌詞カードが中国語なのに、テープを聞いたら日本語バージョン（「何日君再来」の部分だけ中国語）だったのです。それで歌詞カードの通りに中国語で日本語の学生さんたちに歌ってもらって以来、この曲は「お気に入り」の中国語の歌の一つになったのです。勉強のつもりで日本語訳に挑戦してみたのですがなかなか気に入った訳ができず今日にいたっていましたが、最近になって中藺英助著「何日君再来物語」という本があるのを知ったのです。（注：興味のある方には是非この本をお薦めします。）そして、本の中でこの歌に関するいろいろなエピソードとともに著者による日本語訳があり、長年の問題がいきなり解決した次第です。皆さんの中で、中国語バージョンを持っている方は、出来ましたら聴きながら以下の翻訳文をご覧ください。意味がわかったら、次は目を閉じて音楽だけを聴いてみてね。どうですか。

一、 好花不常開	よき花常には咲かず
好景不常在	よき運命（さだめ）常にはあらず
愁堆解笑眉	愁い重なれど面（おもて）に 微笑み浮かべ
淚洒相思帶	涙溢れてひかれる想い濡らす
今宵離別後	今宵別れてのち
何日君再来	いつの日君また帰る
喝完了這杯	乾ませこの杯を
請進点小菜	召ませこの小皿
人生難得幾回醉	人生幾度酔う日有らんや
不歡更何待	ためろうことなく歡つくさん
「来来来、	「さささ、この杯乾して
喝完了這杯再說（口巴）」	いまひとたび語らしましょう」
今宵離別後	今宵別れてのち
何日君再来	いつの日君また帰る

（以下略）

一

忘れられない あの面影よ
ともしびゆれる この霧の中

二人ならんで 寄りそいながら
ささやきも ほほえみも
楽しくとけあい 過ごしたあの日
ああいとしの君 いつまた帰る
何日君再来

二、

忘れられない 思い出ばかり
別れて今は この並木道
胸に浮かぶは 君のおもかけ
思い出を 抱きしめて
ひたすら待つ身の わびしいこの日
ああいとしの君 いつまた帰る
何日君再来

三、

忘れられない あの日の頃よ
そよ風かおる この並木道
肩を並べて 二人きりで
喜びも 悲しみも
うち明けなぐさめ 過ごしたあの日
ああいとしの君 いつまた帰る
何日君再来

- 最近になってテレサテンの「何日君再来」は4種類あること、またジュディオングも歌っているCDがあることを知り驚きました。戦前は「支那の夜」で有名な渡辺はま子や一世を風靡した李香蘭（山口淑子）によって歌われていたそうです。

そしてこの曲を最初に歌ったのは「周旋」（シュウ、セン）と言う歌手で、それから極みつきは中国人男性歌手（黄清石）による日本語バージョンがあるとか。同じ曲がこんなに多くの歌手によって歌われていたとは夢にも思いませんでした。

「いつかこれらのテープ（CD）を一堂に集めて聞いてみたいなあ」と思うのは欲張り者の夢物語でしょうか？

- 今月の台中会の月例会で日本語と中国語による「何日君再来君」を全員で歌いました。ちょうど今月末で日本に帰国してしまう人がいたので、最後は

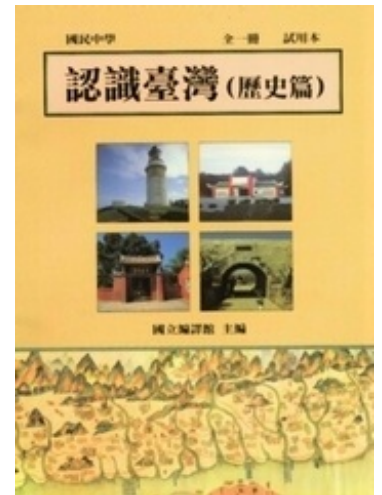
「いつきみ（台湾に）また帰る？」と大きい声で歌ったら、当の本人は「日本に帰りたくないよ！」だって。これには参加者一堂大笑いでした。

皆さんは台湾の年配者にどうしてそんなに日本語の達者な人がいるのか、疑問に思ったことがありませんか。ぼくは、ある時、知り合ったばかりのおばあさんにその事を聞いてみたのです。でも答えを聞いて「あ～あ。こんなこと聞かなければよかったなあ。」とあとで後悔したのです。どうしてかって？ それは、こういう答えだったからです。

「わたしたち戦前の人には悲しい事に日本語しか話せないのよ。」
ああ、このような人たちがいるのを果たしてどれだけの日本人が知っているのでしょうか。そして、そのおばあさんに「日本はどうして台湾を見捨てたのですか。」と聞かれ返答に窮したのです。彼女たちは国籍欄に日本と記載されていないだけで紛れもなく日本人なのです。もしあなたが彼女のような立場だったら今の日本をどう思うのでしょうか？

現在台湾では、中学生の歴史の授業に「認識台湾（歴史編）」という教科書が使われています。この教科書を見て感じる事は「日本統治時代」のことを客観的な尺度をもって評価しているのに驚かされる日本人が多いのではないのでしょうか。

「戦前の日本は軍国主義の下で韓国や台湾を武力侵略し植民地にした。現地の人を差別し、皇民化政策の一環として日本名に改姓させた。云々。」と教えられてきた戦後の日本人の一人として（この教科書は日本語版もでていますので、）是非取り寄せて台湾における日本統治時代を再認識してもらいたいと思っています。



1895年当時の清の国から台湾を割譲してもらった日本政府は、台湾で現地の人と直接接触する機会の多い日本人（警官、教師など）のために台湾語大辞典を編纂、「台湾語」を勉強するよう奨励し、台湾人には日本語教育を施したのです。

日本統治時代が終わる頃には、日本語のわかる人が75%までに達していたのです。それで、当時の台湾人にとって日本語は生活手段の言語だけでなく、現代知識を吸収する言語となり台湾社会の文明化に大きな役割を果たしたのです。（認識台湾P72）

では戦前の台湾の文明化をどのように進めたのかを知る手掛かりが上記の教科書の中に記述されていますので紹介してみましょう。

まず、時の日本政府がやったことは、当時台湾社会の悪習（纏足、辮髪、アヘン）を

徐々に禁止していったことです。それに伴い、次の3つの観念を徹底的に植え付けていったのです。

(1) 時間の観念

総督府は週制度と標準時間制度を台湾に導入し、官庁、学校、工場なども就業と休息の規定を制定し、職員や工員、学生に規律を守るように厳しく要求したのです。たとえば勝手な遅刻早退を許さず、出勤、退勤時間を守らせ、汽車やバスの時刻表を定め乗客の便を図ったのです。1921年からは日本国内に合わせ、毎年6月10日を「時の記念日」と定め官庁や団体などを通じて講演会やパレード、或いは音楽会を行い、ポスターを貼り、ビラを配るなどして時間の重要性を宣伝し、時間に正確であり、時間を守り、時間を惜しむ精神の養成を期し、
民衆に日常生活における時間の標準化と時間厳守の啓蒙に努めたのです。

(2) 順法精神の確立

総督府は警察と保甲制度を用いて有効に社会支配を達成し、犯罪防止と治安維持を厳密に行い、民衆が射幸心で法律を犯さないようにしたのです。同時に学校や社会教育を通じて近代法治観念と知識を注入し、法律や秩序の重要性を学ばせ、それに加えて司法は公正と正義を維持する事で民衆の信頼を獲得したのです。この影響で、民衆は秩序を重んじ、規律を守るなどの習慣を養い、遵法精神を確立したのです。

(3) 衛生観念の確立

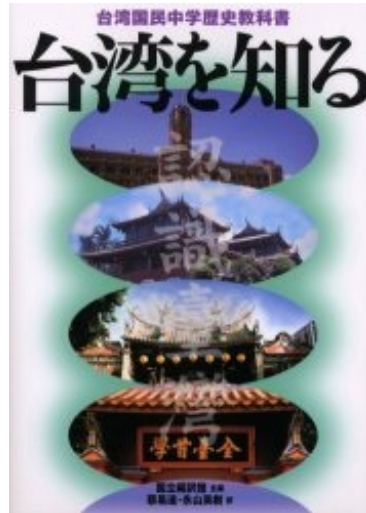
総督府は日本植民地統治の当初、水道を敷設して都市住民にきれいな飲料水を供給し、都市の地下排水工事を行い、各家庭の玄関にはゴミ箱を備えるよう定め、規定通りに廃棄物を処理させ、保甲組織を動員して定期的に地域環境の清掃活動を実地し、さらに予防注射、隔離消毒、ネズミ捕り、強制採血、そして薬の供給といった防疫事業を実施するなど、近代的な公衆衛生と医療制度の確立を積極的に行ったのです。これにより、ペスト、マラリア、コレラ、腸チフスなどの伝染病の退治に努め、かつ台湾人の公衆衛生と医療衛生に対する観念と習慣が改められたのです。

このようないい観念、習慣を植え付けられことは、戦後台湾で支配階級だった外省人（戦後中国大陸からやってきた人たち）に対する台湾人の近代文明人としての最低限の証であり、密かな優越感をもたらすことものだったのです。

●この教科書は発行当初、主に外省人から「親日」「媚日」「植民地美化」といった罵声を浴びせられました。でも従来の教科書は、この時代について「日本の残暴統治50年」と言った一言で片付け、その実情についてはあたかも存在しなかったように何もとりあげてこなかったのです。戦後生まれの多くはこの時代について全く知識がないのです。本書では

これを初めて取り上げ、全体の4分の1と多くのページを割いています。しかも記述は公正に
して的確で、どこかの国のように反日政策に基づく歴史の書き換えは見られないのが特徴です。
(蔡易達氏)

- 参考：台湾国民中学歴史教科書「台湾を知る」
発行所 株式会社雄山閣 定価1500円（税抜き）



台湾の果物（レイシ）

今月（旧暦5月）は、セミの声のさえずりとともにレイシの季節なんです。

いつも週末になると、市の郊外にある山へハイキングに出かけることが多いのですが、その登山道の入り口付近にはレイシの木がたくさんあります。今の時期は木の枝には緑色から赤褐色に熟したレイシの実が枝も折れんばかりにぶらさがっているのです。

荔枝 [Lizhi]

中国の華南原産でムクロジ科の常緑高木。葉は大きな羽状複葉。枝先に
花弁のない小花を綴る。果実は卵形でリュウガン（龍眼）に似るがやや大きい。
外面に亀甲紋があり、赤く熟す。果実は多汁で香気があり美味。レイシ、
ライチとも言う。（広辞苑より）

● 数年前に、彰化に住んでいる友人がレイシ狩りに誘ってくれました。

そのときの採りたてのレイシのおいしさと言ったら、今なお忘れることができません。上質のレイシは丸くてはちきれそうで、外側の皮は鮮やかな赤で、むくのは簡単です。中は白くて透き通って輝き、口の中にほおぼると、甘みが口全体に広がり、種は小さく果肉が厚いのです。友人はレイシを採る時は老木を選ぶように教えてくれました。老木になるほど味わいが深いのだそうです。



またこんな話も聞きました。あまりのおいしさにたくさん食べ過ぎると胸焼けを覚えたり、鼻血が出たりするそうですよ。でもそんな時はレイシの皮だけで水で煮て飲めば大丈夫だって。不思議ですよ。レイシの果肉は胸焼けを起こし、その皮はそれを治してくれるなんて。幸か不幸か、ぼくは鼻血が出るほど一度にたくさん食べ過ぎたことはないのですが、この話の真偽は定かではありませんが、どなたか体験した方おりませんか？

皆さんはあの有名な楊貴妃の大好物な果物がレイシだったことを知っていましたか。彼女はレイシを食べ過ぎて、頭がのぼせたことはなかったのでしょうか？

「一晩井戸水で冷やしたレイシは最高の味だわよ。たくさん食べてものぼせないんだから。」とレイシ売りのおばあちゃんは話していましたが、かの楊貴妃もそうやって食べていたのでしょうか？

（注）日本に住んでいる皆さんの中には荔枝を「ライチ」の名前で馴染んでいる人も多いと思いますが、我が家ではいつも「レイシ」と呼んでいるのでここでは習慣にしたがってレイシとして紹介したことをご了承ください。

今日から8月、早いものでこのメルマガは創刊1周年を迎えることができました。これも偏に皆様方のおかげであり深く感謝しております。さて、先日広島県にお住まいの伊藤さんという方がメルマガ44号（歴史教科書）を読んだ感想を下記のようにメールで寄せてくれました。

メルマガで紹介されたおばあさんの話中「・・・悲しい事に日本語しか・・・」と「・・・台湾を見捨てるのですか。」など。これは、誰にもわからない、本人にしかない大変な事実です。K I S O U 3は、いい人に出会いましたね。これこそ、大切にしなければならない本当に台湾を考え、真剣に日本のことを心配なさってください方ではないでしょうか。お話されたおばあさんは1930年初期以前にお生まれになった方でしょうか。（中略） そのおばあさんは母国語ができないので、なにか損害を蒙っていらっしゃるのでしょうか。湾内には、そういう方々を考える団体みたいなものは無いのでしょうか。大変な過去の残した、手の届かなかった事実ですね。

伊藤さんにメールをいただいて返事をしなければと思い、今日までのびのびになってしまいましたので、ここで返信を兼ねて、そのおばあさんが参加している「玉蘭荘」を皆さんに紹介します。

（注：内容は以前玉蘭荘を訪れた際のパンフレットを参考にしています。）

玉蘭荘は日本人宣教師堀田久子氏により、日本語での活動を通して高齢者の心身を支えるデイケアセンターを目指して今から14年前（1989年）に設立されました。近年、台湾も日本同様高齢化社会への道を一途にたどっていると言って過言ではありません。でも、台湾においての高齢化社会を考える時、まず、複雑な過去の歴史を避けて考えることはできません。玉蘭荘に通ってくる人たちはその背景により次の3つのタイプに大別することが出来るそうです。

1 過去50年に及ぶ日本統治時代（1895～1945）に日本語を使って生活してきた人々。日本教育によって文化や習慣までも身につけさせられた人たち。終戦後、既に日本教育により、自己形成がなされていた人々は、戦後は中国教育を強いられるという境遇におかれました。又、この中には台湾生まれの日本人も含まれます。

2 日本統治時代に台湾の男性と結婚した日本人女性で終戦後台湾にて夫と共に暮らし、子供を育て上げた後、夫に先立たれた人たち。

3 戦前日本より中国大陸に渡り、終戦後現地で中国人と結婚し、夫と共に台湾に移り

住んだ日本人妻の人たち。

歴史を顧みて、これらの人々が自分の気持ちを最も適切な表現ができる言語は日本語なのです。しかし、終戦後の国民党政権による戒厳令が解かれる15年余り前までは日本語の使用は禁止され、日本文化からも遠ざけられてきたのです。中には不安定な国情を案じ、愛する子供を守るつもりで安定した国に留学させた結果、子供たちは外国に定住し、台湾に残ったのは年老いて孤独な親のみと言った例も少なくないのです。

苦しい時代をいくつもくぐり抜け高齢期を迎えた人々にとって、なつかしい日本語での集いや若かりし頃歌った日本の歌の数々を大声で自由に歌える喜びはきっと何物にも代えがたいものだと思います。また、それらは高齢者の心を支え、心身ともにケアする役割をも果たしているのです。私たちはこの社会を構成する一員として、まずこれらのことをよく認識し、台湾の高齢者問題を考えなければならないと思います。

台湾の置かれた歴史的的特殊事情を理解し、特にこの世代の高齢者の活動を支援し、ケアして行く“癒しの場”、それが「玉蘭荘」なのです。

「玉蘭荘」についてもっと詳しいことを知りたい方は、下記をクリックしてアクセスしてみてください。

玉蘭荘のホームページ：

<http://gyokulansou.disciple.com.tw>

Eメール：ylcs@ms51.hinet.net

(エピローグ)

「おばさん、高橋先生のことが新聞に載っているよ。」と、ぼくはいつも懇意にしている蔡おばさん(78)に電話をしたのが始まりでした。

高橋先生は湾生(台湾で生まれ育った日本人のこと)で、蔡おばさんの先生なのです。蔡おばさんにとって「高橋先生はどんな人?」と前日に聞いたばかりで、あまりにもタイミングのよさにびっくりしたのです。

「そうねえ。先生は先生なんだけどね。小さい頃はよく叱られて怖かったけど、この年になってみると、兄のようでもあるし、お父さんみたいでもあるし、不思議な存在だわね。自分の家族の一員と同じだわね。日本に行ったら必ず先生の家には寄らないと怒られるのよ。」と延々と先生の話話を語ってくれたのです。

そして、その日の夜その蔡おばさんから電話があったのです。

「先生が台湾に来ているんだって。明日の夜、先生の歓迎会があるので、あんたも参加しない?」

「参加者はみんな先生の教え子さんばかりでしょう。(ぼくのような)部外者でも構わないの?」

「大丈夫よ、新聞に載った内容のこと、直接先生から話を聞けるわよ。」

今月5日付けの新聞に載ったという記事の内容は下記のとおりです。

「数百体の遺骨が収められている日本人警察官が建てた
豊原聚星観～三代目に引き継がれる」



豊原市中里里「聚星観」は無縁仏の遺骨を祀り、地方の人々の信仰の中心となっている所である。今年の旧暦7月は「聚星観」にとって特別な意義がある。それは82年前に聚星観を建立した日本人警察官の子孫が参拝のために訪台するからである。

今回は参拝のバトンを三代目の息子に引き継がせることを正式に宣言することになった。このことは地方の人々に美談として広く伝えられている。

「聚星観」の物語は日本時代にさかのぼる。1921年ごろ日本政府は台湾各地の農地開拓を奨励し、墓地も例外なく民間に売られ開墾された。所有者のあるお墓はその子孫たちがお墓を移転して埋葬することができたが、身寄りのな

ちがお墓を移転して埋葬することができたが、身寄りのな

い無縁仏の遺骨は当たり一面に散らばり、もっとひどいの

になると清朝時代の戦乱の中で死亡した合葬者も掘り起こされ放置されたままであった。当時豊原市頂街警察署署長である高橋央氏はこれを見るに忍びず発起人として地方の熱心な有力者たちに納骨堂の建立を発願した。一体の遺骨に二圓の費用を払い数百の無縁仏の霊に安息の場を与えたのである。

豊原市「聚星観」は現在多くの民衆の信仰中心であるが、日本警察の発願で建立された物語は数十年誰にも知られていなかった。そしておとし高橋正男氏が父親の遺命で台湾のどこかにあるはずの「聚星観」を探し出そうと台湾を訪問し、豊原市中里の黄英瑜里長の協力により、思いがけず聚星観の柱の上に台中県第一作家と尊称されている張麗俊の書かれた題名を発見した。

張麗俊氏の残した数十年の日記により日本警察が身寄りのない無縁仏のために発起人としての発願で納骨堂を建立した事実と功績が明らかとなり、地元の人々の賞賛を受けた。

昔とはだいぶ変わった豊原市街で聚星観を探し出すのはなかなか難しかったが、ようやくその場所が確認された。台湾生まれの高橋正男氏は内埔小学校で教壇に立ったことがあり、今でも多くの教え子と交流を続けている。親孝行な正男氏は数年前から台湾の政治と社会情勢の変化により安心して学生たちに伝達することが出来ると思い、はじめて自分の父親のことを明らかにした。

正男氏は折りあるごとに家族を伴って訪台している。今年90歳の正男氏は今回を最後の訪問とし、今後三代目にあたる正氏に伝承者としてこのバトンを引き継がせるとのことである。

(これは2003/08/05中国時報夕刊に掲載されたものです。)

(筆者より：仏教のお寺は○○寺と呼ばれ、民間宗教は○○廟、そして道教の場合は○○宮となり、道教でも道士(仏教の和尚さんに相当)がいる場合は聚星観のように「観」が最後につくんだそうです。また豊原市は台中市の北隣にあり、台中県の県庁所在地です。)

その晩「恩師高橋先生を囲む会」が市内のホテルで開かれました。参加者は当時の台中師範の教え子さんたちで、戦後60年を過ぎた今も先生を慕って集まってきたのです。

先生が入場すると、誰しものが再会を喜び合い、先生の最後の台湾訪問を知っているので感慨深い同窓会になったのでした。

数年前に一度お会いしたことを覚えていてくれた先生に、ぼくは

「先生、豊原市の名誉市民になられたんですね。おめでとうございます。ここに新聞の切抜きを持ってきましたよ。」と祝福しました。

「いやービックリしたよ。現地に着くと、町じゅうの人が待ち構えていて、爆竹を鳴らして歓迎してくれ、またテレビ局や新聞社から取材をうけるなんて想像もしてなかったよ。そして市から名誉市民の称号をもらえるなんて驚いたよ。君。」と先生は興奮気味でそのときの様子を語ってくれたのです。

「先生、何かお父さんのことについて書かれたものがあるそうですね。」

「うん、そんなこともあるだろうと思ってこんなものを準備してきたんだよ。」と言ってくれたのが下記のプリントでした。

萬善堂創設の由来

父、高橋央（なかば）が書き残した回顧録によると

「1909年（明治42年）に台湾巡查となり、大甲支庁直轄外勤として大甲街第三第四保を受けもち、その後大安港派出所勤務を経て1913年（大正2年）9月后里派出所に転勤しました。この頃台湾全島で開田造成が盛んになり、その為に各所に散在する「払い下げ」になった有縁者墓地、無縁者墓地の開墾が盛んになった。有縁者墓地は改葬して開墾されるが、無縁者のお墓はそのまま人骨を放置するため、至る所に散乱し、また伝説に寄れば清朝時代、豊原地方に戦争がある。戦死者を会葬した所からも多数の人骨が掘り出されて始末に困っていた。

そこで、私は烏牛蘭の林慶全氏夫人が慈善心に厚いことを知っていたので、この散乱している人骨、無縁者や戦死者のために納骨堂を創設し会葬する費用を喜捨していただきたい事を相談したところ、それは大変良いことだと快諾してくれました。

それで早速上三南抗の羅安氏（豊原製紙会社社長）に納骨堂の設計を依頼し、下南抗共同墓地の一角に約20坪のコンクリート屋根のレンガ造りといった堂々として立派な納骨堂を完成し、数百人分の人骨が収納を完了致しました。創設された納骨堂は「豊原萬善堂」と命名され農曆7月16日を祭日と決定したが、平日でも線香の煙が絶えたことがなく、参詣者が非常に多く信仰の中心となりました。

萬善堂は病気快癒の祈願が多いと聞いています。私は病気にかかった時も日本に帰国してからも信仰していたので、台湾にいた子供たちに快癒を祈願してもらい、萬善堂の御加護で速やかに平癒したことがありました。私が今日まで長生きして健康なのも萬善堂を深く信仰していたからと思っています。今では子供たちが代理となって台湾訪問の節にはきっと参詣しています。

亡き御霊を 集めて祭る 萬善堂
遠くとも 今なお偲ぶ 萬善堂
永しえに 守らせたまえ 萬善堂

（注：「萬善堂」はその後「聚星觀」と改名された。）

食事をしながら、先生にインタビューしてみました。

「高橋先生の生まれたのはいつですか？」

「僕が生まれた頃はね。当時水力発電により電気時代の幕開けと言われた頃でね。大正3年（注：1914年）の1月に后里派出所で生まれたんだよ。」

「お父さんは、台湾語が話せたんですか？」

「父はね。后里派出所時代から台湾語の習得に努力し、豊原時代には台中州の警察でも台湾語通で有名になってね。よく昼夜の別なく様々な困りごと相談事に宿舎まで押しかけられていたなあ

。みんなから<高橋大人>とか<部長>とか呼ばれていて信頼が厚かったんだな。」

「素晴らしいお父さんだったんですね。で、お父さんはずっと警察の仕事が続けられたんですか？」

「いや、豊原街の行政の精通者で台湾語が達者だったから、豊原街役場の助役就任することになってね。それで25年間勤めた警察を、昭和7年（1932）に退職したんだよ。でも、家庭の事情などを抱えていたので翌年8月に多くの人々に惜しまれながら日本へ帰国したんだよ。」

（注：帰国したその後は、町役場の助役を勤めたり、老人会会長などをしていたが昭和41年（1966）に84歳で亡くなったそうです。）

先生が教え子さんたちと楽しく会食をしているのを見ていて羨ましくなりました。どうしてこんなに長い間教え子さんたちと交流ができるんだろうと思っていると、そばに同席しているご息子の正至氏との会話の中で、正至氏はこんなことを言っていました。

「親父はね。毎年台湾の教え子さんたちに年賀状を出してるんだよ。発売と同時に500枚も買い込んで来て、一人一人に手書きで一枚一枚書くんだよ。」

年賀状を書かない人もいるし、年賀状をパソコンで入力する時代に、いままで途切れることなく毎年500枚もの手書きの年賀状を出していたとは夢にも思いませんでした。こうした隠れた努力があったのです。先生にしてみれば当たり前のことかもしれませんが、本当に先生の台湾の教え子さんたちに対する気持ちが、この一言を伺って、痛いほどわかるような気がしたのです。

（プロローグ）

最後ホテルで別れる時、蔡おばさんは初老の正至氏に言いました。

「私はね、あなたが生まれたばかりの写真を、今なお持っているわよ。」

それを聞いた正至氏は照れくさそうにこう答えたのです。

「ああ、いやだ。そんなもの大事にしまっておかなくてもいいから、（帰ったら）すぐ破くなり、焼き捨てるなどして下さいよ。

後生だから。」

先生の家族3代と付き合ってきた蔡おばさんのような人がだんだんいなくなりました。あと20年もしたら、戦前を知る世代の人たちが誰もいなくなります。日本人と台湾人の間にはこのような緊密な草の根の交流があったことをずっと後世の人たちに残して置きたく、紹介しました

。

2003/11/14

先月台中会総会の会場となった台中師範学院は来月12月で80周年の佳節を迎えます。

その台中師範の卒業生で戦前日本教育を受けた洪伯若先生は、今でも当時の（日本人の）恩師と手紙のやり取りをしていて、洪先生は次のような歌を詠んでいるのです。

「懐かしき 恩師の便り 見ていれば
幼き頃の 思いで浮かぶ」

最近、洪先生から「日本時代の台中師範」と言う本を借りた際に、当時のクラスメートの名簿を見せてもらいました。その同窓会名簿の中に下記のような詩が収められていました。この詩を読んで、この詩がとても気に入りました。何でもこの詩の作者は台湾の人でということにビックリしました。このような素晴らしい詩が書けるなんて----。戦前日本教育を受けた人たちは日本語を話したり、読んだりはもちろん、詩や俳句、短歌まで作れて今の日本人以上に創作能力がある人が多いようです。そしてこの詩にある「このような生き方ができたらいいなあ」と思うのは、ぼくばかりではないでしょう。誰しも同じ考えだと思います。一人占めにするわけにはいかず、今月の台中会の会報にも中国語訳を入れて掲載しました。また先だってごく一部の友人、知人にメールで送信したのですが、あまりにも反響の大きさに驚き、もっと多くの人に読んでもらいたくここに改めて紹介することにしました。

笑顔で振り返られる人生を

自分に対して忠実に
物に対して確実に
人に対して誠実に 接してゆけば
たとえ そうすることによって
よい結果が得られなくても
決して悔いはないものである

わたくしの人生はたった一度しかなく
この世にたった一人しかいない
自分なのであるから
その自分を生かし 周囲のものを生かし

すべての人を生かしきるような
人生にしたいものである

つらいときや かなしいときは
いつも澄んだ瞳で広く深い空を見上げ
姿勢を正して
周囲にただよう新鮮で透明な空気を
胸いっぱい吸いこもう
うれしいときや たのしいときは
いつもその幸せを一人じめにせず
人にわかち合って共に喜ぼう

いくらこの世が 喧騒（けんそう）と
欺瞞（ぎまん）に みちあふれていても
みんながもっと美しい
ほんとうに尊いものが
あることを知っている

そうしたものを限られたいのちの中で
せいっぱい育てあげられたら
きっと うれしくてたまらないだろう

そして いつの日か
人生のおわりに至ったあかつきには
自分のたどって来た道をふりかえって
静かにほほえめるような
悔いのない一生を送りたい

日台双方に見る社会現象

6月下旬に台湾旅行で気付いた日本と台湾の社会現象で似ている面と違った方向に発展している面をまとめたものです。

【ケータイ文化】

若者の日本語では携帯電話のことをケータイと呼び、いつの間にかどの世代の日本人もこの言葉を使うようになりました。ケータイは最早世代を問わず多くの国民の必須アイテムになっているのは日台で共通した社会現象と言えそうですが、その発展の仕方、方向が違って来ているように見えました。

日本は以前よりは安くなったとはいえケータイの通話料金はまだまだ高いです。大人もそうですが特に親の膍を嚙っている中高生達は通話時間が長くかかる会話よりも同じ内容で通信時間が短くて済むEメールの送受信にケータイを利用することが多くなっています。都会であるか田舎であるかを問わず電車・バスの中や街中でもケータイのメールを読んだり打ったりしているシーンは通常の光景になっています。ケータイでメールをやりとりすることが、若者達が楽しいと感じることの中で大きなウエイトを占めているようです。

今では機械音痴の私の妻さえケータイでメールを打っています。片側の手の親指だけでメールを打つので親指族という新しい言葉もできました。メール機能が付くようになってから公共の乗り物内で、ケータイで会話するシーンは以前よりは減りました。更に次第にデジカメ付きのケータイが標準になって来始めました。

このためモニター画面はある程度の面積が必要でケータイの小サイズ化は図られているものの台湾人から見れば大きいと感じるでしょう。

日本の公共の乗り物では必ず車内でのケータイでの会話を控えるか、デッキに行って会話するように車内放送します。勿論従わない輩はいますが。

台湾ではケータイは専ら電話機の携帯機能だけを追求しているようで私が台湾に行く度に小型化されていると感じます。日本のケータイと比べるとかなり小さいと感じます。日本のように黙々とケータイでメールを打ったり読んだりしているシーンはほとんど見かけません。

捷運の車内には心臓にペースメーカーを埋め込んでいる人を守るために電源オフのゾーンがあるものの、車内でのケータイによる通話をえ控えるよう要請する表示も車内放送もありません。乗り物の中でもあちこちでケータイで会話しているシーンに遭遇します。

日本ではデジカメ付きのケータイが普及してきたことにより本屋さんで本を買わずに中味を写し取る「デジタル万引き」や女性の下着を隠し撮りするような悪用も起きています。日本の新しいケータイには時計、インターネット、デジカメ・ムービー、音楽のダウンロード

の機能が付いていますので腕時計、パソコン、カメラ・フィルム、デジカメ・ビデオカメラ、ウォークマン等がその分売れなくなって来だしています。今後も色んな機能がケータイに集約化され従来独立していた個々の産業が脅かされて来ると予想されます。

【女性のヘアカラー】

台湾の女性も黒髪よりも西洋人風の髪の色を好む人が増えて来ています。今回の旅で注意して見ましたが社会人になっている若い女性から中年の女性は栗毛、赤毛に染めている方が多くなっていました。5年前くらいまでは女性の髪の色を見るだけで日本人か台湾人の区別ができましたが今では少なくなった黒髪のままの女性しかすぐには区別が付きません。いずれは日本のように女子高生や若い男も髪を染めるようになるのか、学校の規律がまだ日本より厳しく、また徴兵がある台湾ではそうはならないのか個人的には興味のあるところです。

【エスカレーター】

台北駅や捷運各駅のエスカレータでは歩いて上がる人が多くなりました。日本の関東地方では慣習的に歩かない者は左側に立ち右側を歩いて上がる者のために空けますが、台北では歩かない者は右側に立てと明示してあります。台北では数年前まではこのルールに気付かず左側に立っているシーンも少なくありませんでしたが今回の旅ではいつもルールが守られていました。日本も台湾も時間に追いまくられる生活が多くなってエスカレータでも歩いて上がる者が増えているのでしょう。

【男の持ち物、身なり】

日本人男性、特に中年以上の男性は上着無しで街に出る時は大抵セカンドバッグなるものを携帯します。旅行となると男の必須アイテムと言えます。ポケットが足りないので貴重品、タバコ・ライター、ポケットティッシュペーパー、ガム、櫛、筆記具その他の小物入れです。どうやらこの習慣は台湾男性には合わないらしく、私は外見で日本人か台湾人かを見分ける場合にセカンドバッグの有無を基準にしています。

また日本の若者は10年くらい前から上着無しの格好ではシャツの裾をズボンの中に入れなくなり、中年以上の世代もその影響を受け始めています。私も上着無しの時は大抵シャツの裾をズボンの外に出しています。この格好も中年以上の日本人と台湾人を見分ける基準にしています。

正式な名前を知りませんが少なからぬ台湾の男性がズボンのベルトを通す帯状の布に何種類かの鍵やケータイを収納するケースを吊り下げています。最初見た時には珍しいファッションだなと少し驚いたものです。日本人には鍵をズボンに吊り下げる習慣はないのでこれも日本人と台湾人を見分ける基準になります。

[ジベタリアン]

最近の日本の若者は暫くの間も立っていることができず地べたに尻をつけて座り込むためこのような軽蔑の気持ちを込めた言葉ができました。駅、公園、コンビニの前だけでなく街中や電車の床でも見かけます。スカートの女の子などは本人が気付かぬうちにパンチラを見られています。

まだ多くはありませんが台湾の捷運の乗り換えに通るスペースや駅前でも若者のジベタリアンを見かけるようになりました。

栄養バランスが崩れているのか睡眠不足なのか知りませんが台湾の若者も次第に体力が落ち始めているのではないかと危惧しています。

[慎重な日本人、行動的な台湾人]

今回のSARSのようなできごとがあると国民性の違いが顕著になるようです。

WHOは6/17に台湾への渡航延期勧告を解除しましたが私が乗った行きの6/24と帰りの6/28の飛行機には日本人客は全体の2割程度しか乗っておりませんでした。私が利用した旅行社のツアー客は従来は少ない時でも5, 6名はいるのに今回は私一人でした。

日本の旅行社がSARSで利用客が減っているといっても料金を大して安くしないこともあるのかも知れませんが、少々安くしても勧告が解除されてからまだ一週間程度では慎重な大多数の日本人は世界中から不特定多数が出入りする空港に行くのさえ憚るのが普通です。私などは軽率な部類に入るのかも知れませんが、多分次に大勢が旅行する7月下旬の夏休みやお盆休みになっても海外旅行は台湾以外の国へも控えるのではないかと思います。

一方台湾人は6/24は空席があったとはいえ乗客の8割を占めていましたし、6/26から公共の乗り物でのマスク着用が不要になり、学校も夏休みに入り、料金は安くなっている6/28の飛行機は子供連れの台湾人ツアー客で満席になりました。実質安全でしかも料金は得となればチャンスを見逃す手はないという考え方のように見受けられます。

気弱なサラリーマンは会社にも妻にも長期休暇を申し出る勇気がなく精々4泊5日のパック旅行しかできません。自分で安売り航空券を手配しても同じレベルのホテルに泊ろうとするとパック旅行よりも高くなり金と労力の両方を損する仕組みに成っています。当然台北のホテルに泊る旅になります。現地ガイドさんには桃園の空港と台北市内のホテルの往復の送迎をしていただくだけのフリーツアーです。

4泊5日は十分な時間があるように見えますが羽田14:00発の中華航空で行くので台北のホテルに着くのは現地時間18:00を過ぎた頃になります。羽田8:50発は田舎に住む私にはツアーの規定の出発1時間前集合に間に合わないのです。帰りは11:30桃園発に乗りますが現地ガイドさんは絶対に遅れることがないようにと8:30にホテルに迎えに来ます。結局2日弱は移動のために時間を費やすことになり実質フリーな時間は3日と数時間ということになります。

還暦間近のサラリーマン旅行者にとって温泉に入るのは何よりのリラックスタイムです。台湾に行き始めた当初は地熱谷の近くにある私営の浴場に入っていました。温泉マークが目立つのですぐ分かります。サンダルが用意してあり個室で100元くらいだったと記憶しています。

当時は昔の鉄道で旧台北駅の裏側から出発する淡水線で北投に行き、そこで新北投行きに乗り換えていました。一部ドアが壊れている箇所にはロープが張っており、その分風通しがよく、トイレの車内側の壁には共産党のスパイを見つけたら莫大な報奨金がもらえる可能性があることを書いた掲示がありました。

初めて淡水線の鉄道に乗って駅に着くたびに駅名を確認している日本人に同情してくれたのでしょうか。隣りに座っていた女子高生が私の行き先を聞き、北投で新北投行列車に乗り込むまで見届けてくれました。行く前には一度きりの台湾旅行と思っていた私が既に23回も行くことになったのはこの名も知らぬ女子高生の親切がきっかけです。

鉄道が廃止されてから捷運(MRT)が開通するまでは一度だけバスで行ったことがありますが松江路の私の定宿からは本数が少なくて不便なので暫く温泉に行くことがなくなっていました。

捷運が開通してからは北投、新北投がとても近くなりました。そして北投に公営の温泉浴場を見つけました。松江路中華日報からはバスで民権西路承德路口に出て民権西路駅から捷運淡水線に乗ります。北投駅で降りて数分歩くと北投国小に着きその真向かいの水道局ビルの1階に公衆浴場があります。入浴料は月～金が40元、土日が80元です。タオルを忘れたら40円で売っています。毎朝5:30から開いています。着いた翌朝から帰る前日の

朝まで3回温泉に行くことができます。平日に朝風呂を楽しめるのは既に引退された方々か私のような旅行者になります。日本の浴場と違い着替えるための前室やスノコは残念ながらありません。浴室の端にあるロッカーに衣服や貴重品を入れ、靴も浴室の隅っこに置いておくことになります。

台湾人を装ったつもりでも入浴客にはすぐに見破られてしまいます。還暦近くの日本人の男はステテコを穿いているからです。好奇の視線を感じることもあります。既に引退されている方々には日本語ができる方も多いので日本語で話し掛けられ裸の付き合いが始まることもあります。浴槽は湯温が熱めと普通の二つに仕切られています。常連はほてった体を涼ませるために座る場所は暗黙のうちに決まっているように見えます。皆何度も入ったり出たりして温泉を楽しんでいます。男湯ですので冬でなければ窓は開けっ放しにされています。

日本人のサラリーマン氏は初回に風呂から上がって衣服を着る時にズボンの裾や靴下を濡らしてしまったので2回目からはズボンの裾を折って脱いだり穿いたりし、ホテルのペーパータオルを何枚か携行して足をきれいに拭き取ってから靴下を穿きます。これを見ていた常連の入浴客からうまいことを考えたとお褒めの言葉をいただくこともあります。

地元の方々はサンダル穿き、半ズボン姿ですから羨ましいです。

日本の銭湯や温泉では湯上に冷たい牛乳、ジュース、ヤクルトなどを飲む楽しみがありますがこちらの公衆浴場では飲み物を一切売っていないのが残念です。

湯上りのほてった顔で、濡れたタオルをビニル袋に入れたサラリーマン氏は捷運とバスを乗り継いでホテルに戻ります、その頃には自分の部屋は清掃が済んでいます。テレビをつけて午後から台湾の友人と会う準備をしたり、まだ時間が余っている時には買い物や足裏マッサージに出かけます。午前中のんびりと過ごすことが旅の目的の一つです。

交通

日本の交通費に比べれば台湾の交通費はとても安くて日本のバス代の感覚でタクシーに乗ることができます。サラリーマン氏は最初の数回の旅行では専らタクシーばかりを利用していました。どんなに夜遅くても比較的容易にタクシーが拾えるのも大変便利です。

サラリーマン氏の住む田舎では夜10時を過ぎてタクシーを拾うのは大変なのです。

そのうち台北の地理を覚えたくなり市内バスを利用し始めました。大雑把に例えれば東京の山手線の内側の区間に相当する1段分が当時は8元(冷房車)で冷房なしは少し安かったと記憶しています。遠くから見て窓ガラスが黒っぽいと冷房車だと判断していました。現在は全て冷房車で1段分が15元になっています。

バス停にはそこに停まる路線の全停留所名が書いてあるので自分が行きたいバス停名さえ分かれば何番と何番のバスに乗ればよいか容易に分かります。またコンビニにはバス路線を詳しく解説したミニ本が売られています。4年前では60元でした。このミニ本は官公庁名、学校名、道路名、デパート名、ホテル名、映画館名、病院名、名所旧跡名などどれからも何番のバスに乗ればよいかすぐ分かるようになっています。また詳細なブロック地図も載っているのでバス停がどこにあるかも分かります。サラリーマン氏には通常の地図よりも役立つものです。大きな通りであれば大抵何本かの路線のバスが停まるので大して待たずに目的のバスが来ることが多いです。

MRT(捷運)ができてからは台北市内を東西に走る民権路、南京路、仁愛路、信義路、また市内を南北に走る中山路、松江路、敦化路にはバス専用レーンができてバスだけは渋滞せずに走れるようになりましたので一層便利になりました。何しろ現在でも15元という安さなので適当に来たバスに乗って適当な所で降りてみると台北の地理が早く把握できます。

今はもうありませんがサラリーマン氏が行き始めた頃には文化公車というバスが日曜・祭日だけ走っていて料金は割高でしたが市内の有名な箇所巡りができました。日本のバスのように次のバス停の放送や電光掲示があるわけではないので、地理不案内の内はバス停に着く度に確認しなければなりません。一つ手前のバス停名を憶えておくで安心でした。

車内には大抵路線図が掲示してあるので確認できます。

料金投入時期は路線によって先払い(上車収票と表示されている)の場合と後払い(下車収票と表示されている)場合があります。料金投入方式がどういう基準で決まっているのかは知りませんが路線番号の数字が大きいと後払いです。日本のバスのように両替

機能はついていないので多く払いすぎてもお釣は出ません。

とは言え路線によってバス専用レーンのない所も走らざるを得ない場合がありますから時間帯によって交通渋滞に巻き込まれるのは避けられません。

MRTができてからは所要時間が確実なのでMRTがカバーしている地域にはこちらを利用するようになりました。東京の地下鉄に比べればはるかに簡単な路線ですので東京に通勤しているサラリーマン氏には乗り換えに迷うことは全くありません。

ただ両替機と発券機が別々でしかもバカデカイこと、切符(カード)が大きくて厚いこと、自動改札機のごつい金属棒、プラスチックの座席、つり革・網棚が一切ないという一種のカルチャーショックに苦笑します。大きな切符(カード)は使用開始しても孔が空いていませんで多分回収後磁気記録を初期化して再利用しているのではないかと思います。そうだとすれば日本も真似るべきでしょう。自動改札の何本かの金属棒は不正防止と改札口が日本ほど混まないから選択されたのではないのでしょうか。プラスチックの座席と網棚・つり革なしは少しでもコストダウンするためかも。両替機と発券機が別々でしかもバカデカイ理由は全く分かりません。

何よりも理解に苦しむのは木柵線の車両運行システムと他のMRT各線のシステムの間には互換性がないことです。山手線のような環状線が作れず、相互乗り入れもできないのです。サラリーマン氏はそれぞれの運行システムの導入には別の大物黒幕がついていて一本化できなかったのではないかと勘ぐっています。

MRTのどちらのシステムとも鉄道と同じく北京語、台湾語、客家語、英語の順で車内放送があるのはよくぞこれほどまでの心配りをしたもんだと敬服します。気のせいかもしれませんがMRTができてから足早に歩く台湾人が増えたと感じます。サラリーマン氏はゆっくり歩くほうですが以前は台湾ではそれほど追い抜かれることは少なかったと思います。MRT駅ではエスカレータを歩いたり駆け足で上がる人が増えました。ここでは歩かない者は右側に寄って左側を空けるように書いてあります。関東地方の慣習と逆です。

MRTはバスの運賃の倍以上しますが、故宮博物院以外は台北の主な観光スポット例えば士林夜市、北投・新北投、淡水、西門町、龍山寺、新店・碧潭、動物園や台北駅、市役所、台湾大学などに時間通りに行けるので旅行者には便利です。

サラリーマン氏は毎朝北投の温泉に行く他に空き時間ができると動物園にコアラを見に行ったり、冬の新店では焼き芋を食べ夏はボートに乗ったり、淡水で夕景、夜景を見た帰りに士林夜市で食事したり、龍山寺近くの広州街夜市に行ったりと捷運をフルに利用しています。

龍山寺と言えば台湾に行き始めた頃は寺の周りにも多くの屋台があつて賑やかでしたが屋台が万華駅前の建物の中に移動させられてからは往時の賑やかさをなくしたように感じます。

捷運が出来てからは沿線の開発が進み淡水、新店ではマンション群が林立し台北のベッドタウン化が進んでいるようです。

最近はMRTで観光地を巡っている日本人旅行者が多くなりました。

タクシー業界はMRTの路線拡充の度に打撃を受けていることでしょう。

台中以南の友人に会いに行くとなると短期間旅行者のサラリーマン氏は時間優先で飛行機を利用せざるを得ません。自強号列車や国光号バスでは往復で5時間以上がつぶれてしまうからです。飛行機を利用するにはパスポートを携帯していなければなりません。紛失しないためにできればホテルの貴重品預かりにしておきたいのですが台北のKTV利用のためと国内線飛行機利用のために常にパスポートを携帯する緊張感がつきまといまいます。

航空運賃は単純に距離に比例しているのではないようです。台北・台中間は1305円で、これより遠い台北・高雄間の方が300元くらい安いようです。航空会社間の競争の激しさの程度、利用乗客数、運行できる飛行機の座席数なので決まっているようです。台北・台中間は40~50人乗りくらいのプロペラ機で私が乗った時の乗客数は大抵20人くらいでした。水平飛行になって暫くしたらもう着陸態勢に入るように感じます。

空港の受付カウンターは競争相手の会社同士が隣り合っていて、客引きの声を掛けられます。サラリーマン氏は出発時刻が15分程度の違いであれば自分の好みの小姐がいる方の航空会社を選びます。発券のために二言三言会話するだけでも楽しい思い出になりますから。いつもおまけにアルカリ単三電池4個入りをくれますが旅先では邪魔になるので遠慮します。台北松山空港からタクシーに乗ると料金が割り増しになっているような気がするので雨天以外は少し歩いて民権路まで出てからタクシーを拾うことにしています。タクシー料金を明らかに割り増し要求されるのは故宮博物院の建物を出た所で待っているタクシーです。メーターを倒さず乗り込むときに50元近く上乗せした料金を要求します。一度授業料を払って以後は階段を下りて流しのタクシーに乗ることにしています。23回の台湾旅行の間に少しずつ賢くなっています。

台北から一時間くらいの郊外に出かける場合も時間が確実な鉄道の方を選んでしまいます。以前は各駅停車は全てオンボロ列車でしたが最近は新しい[電車]が多くなっています。日本の通勤電車とほぼ同じでベンチシートです。日本の各駅停車のつもりで一番安い料金の切符で乗ったら車内検札の際に差額料金を請求されました。

[電車]は日本の急行に相当する復興号と同じ料金だそうです。後で列車時刻表を買って調べたらやはり差額料金がありました。以前のオンボロ鈍行は本数は少ないがまだ走っていて所要時間を調べると同じ各駅停車でも[電車]は速いことが確認できました。復興号と同じ所要時間です。台湾の列車時刻表は20円で薄くて小さくオーバーに言えばJRが無料でくれる小冊子みたいです。九州とほぼ同じ大きさなのでそのサイズに納まるでしょう。

車やMR Tは右側通行ですが鉄道だけは左側通行です。日本時代に基本部分ができあがっていたので右側通行システムに切り換えることの方が面倒だったのかなと思います。 [〇〇号]と名称のついた列車(対号特快車)では駅弁の車内販売がありますが、日本のように売り子さんが常時車内を移動して売りに来てくれるのではなくて昼時だったら11時半を過ぎた頃にならないと売りに来ません。数も限られているようで運が悪いと自分の車両に来る前に売り切れになってしまい空腹のまま目的地まで我慢しなければなりません。サラリーマン氏は一度苦い経験をしてからは台北駅のキオスクで駅弁を買ってから乗るようにしています。

小田急、新幹線、地下鉄(丸の内線と日比谷線)、都バスを乗り継いで2時間近くかけて東京に通勤しているサラリーマン氏には台湾の鉄道事情なら日本人のように[痛勤地獄]を味わうこともないだろうと逆に台湾の上班族を羨ましく思います。

台湾にも将来新幹線ができることになっていますが、そうなれば新竹辺りからはきっと、ひょっとしたら台中辺りからも台北に通勤しなければならない人が出てくるのだろうかと思っています。

23回の台湾旅行のうち最初の3回くらいまでは観光が主目的でしたが、4回目くらいから台湾の友人と会うことがサラリーマン氏の旅の目的の半分以上を占めるように変わってゆきました。行く度に友人が増えていったからです。

台北で会える友人達とは昼から夕方までと夕方から夜中までの2組に会うスケジュールになります。台中以南で会う場合には1日に1組ということになります。

古くからの台湾の友人は[その2台湾演歌]で述べたカラオケで知り合った方々です。大体40歳～80歳で日本語が達者な方もできない方もいます。カラオケの女主人のお嬢さんの結婚式にも同じテーブルを囲み披露宴が終わるとカラオケに戻って楽しんだ仲間達です。台湾に友達ができるにつれ自然と台湾社会や台湾の歴史にも興味をもつようになってきます。台湾に関する記事や本に目が止まるようになりました。台湾に関する本は種類を問わず読むようになりました。若林正丈さんの[台湾百科]という本は台湾に関して全般的に、客観的に解説してあるので日本人のみならず中国の歴史しか学べなかった台湾の若者達にとっても役立つと思います。

8年前頃だったと思いますが[台湾万葉集]という本が日本で発売されました。台湾の日本語世代の方々が今でも台湾で日本の短歌を作っておられて、作品の一部をまとめて発行されたものです。上下巻とも買って読後感を書いて送ったことが縁で台北歌壇の会員の方と知り合うことができました。これらの方々のネットワークを通じて短歌には関係しておられない日本語世代の方々とも知り合えました。[がんばれ台湾丸]で台湾のWTO加盟に関する記事をE-Magazineに寄稿なされているAndy Changさんとはこのネットワークで知り合い、彼を通してE-Magazineのことを知ることになったのです。また一人の友人は客家人ですので客家語の簡単な手ほどきを受けさせていただいています。

台湾の友人から逆にサラリーマン氏の家からさほど遠くない所に住む日本人を紹介されたこともあります。この方は旧日本軍の特幹で台湾で終戦を迎え、台湾時代にお世話になった台湾

の方を長年捜しておられ、台湾の方々が手を尽くしてやっと見つかった時には恩人は既に他界さ

れていたという事情があります。昔の樹林口が現在の林口だと分からず現在の樹林方面を捜し回っていたのだそうです。見知らぬ外国人のために力を貸してくださった方々とはサラリーマン

氏も交流させていただいています。

日本語世代の方々とは当然日本語で会話できるのでとても気楽ですがEメールができる方はたったの一人だけですので他の方々とは手紙で交流することになります。

台湾の日本語世代の方々との交流が始まると日本に留学している若者達と知り合う機会も与えられます。サラリーマン氏にとっては日本にいる台湾の友人達が一番新しく知り合ったということになります。留学生は知り合ってから数年後には帰国してしまうことが多い

のですが帰国後も交流を続けてくれています。

新たに訪問する町が増えて行きます。また後輩を紹介してくれるので人は変われど若者との交流が途絶えることはありません。

台湾男子には兵役義務があるので留学生の友人のほとんどは女子です。男子の友人は台湾の大学で日本語を専攻し交換留学で来日した者か、観光で来日した際に留学生の元に立ち寄った者です。男子は卒業後兵役に就くので約2年間は会えなくなりますが除隊後に会うと人間として成長している者が多いと感じます。若者達は全員Eメールができるので随時連絡をとりあっています。

サラリーマン氏の旅は平日なので台湾で若者達と会うのは学校や会社がひけてからの時間帯になります。若者達とは従来式のカラオケよりもKTV(カラオケルーム)で遊ぶことになります。

台湾のKTVは日本のカラオケルームとは比べ物にならないくらいデラックスでしかも安いです。部屋毎にトイレ、洗面所がついているのは当たり前です。主な通りには[銭櫃]、[好樂迪]といったチェーン店があります。以前は何の制約もなしに入れましたが台北だけは数年前から身分証明が必要で外国人のサラリーマン氏はこのため常時パスポートを携帯しなければなりません。国際事情に疎い店員のいる店に当たると台湾人の身分証のようなものはないのかと問われ、日本人には身分証などはないのだと説明しなければならないことがあります。パスポートにはアルファベットでしか氏名が表示されていないのでチェックノートに漢字で記入してくれと言われることもあります。台北以外では同じチェーンのKTVに行っても身分証の提示を求められたことはありません。

台湾のKTVに比べれば狭くて料金も高いですが新宿百人町には北京語、台湾語のカラオケがあります。留学生達とは年に3, 4回カラオケ会を開きます。最新の歌はありませんが1

2年前までの歌はあります。またカラオケの利用者は台湾系や中国系の旬報紙や半月紙を無料で持ち帰ることができます。留学生にとっては久しぶりに読む中国語の新聞ですので喜ばれます、もちろん台湾系の新聞ですが。

現在の留学生達の会話はほとんど北京語になっています。少し前の留学生は台湾語の場合もあったり北京語と台湾語が混じっていたりしていましたが。

台湾のカラオケやテレビドラマが若者の台湾語離れを少しでもくい止めるのに役立っているのかなと見ています。

台湾に行き始めの頃は台湾人同士が会話している様子が口喧嘩しているのではないかと勘違いしたことが何度もありました。言葉が分からないと喋っている勢いだけで想像しますから。逆に日本に来て日本語学校から言葉を学び始めた留学生の中には日本人同士の会話が早口で喧嘩しているように思えたという者もいます。

サラリーマン氏は市場や露店で客と店の人が値段の交渉をしている場面が口喧嘩しているように聞こえたものです。定価販売の社会に慣れて育ったサラリーマン氏は車を買う時くらいしか値引き交渉をした経験がないのですから。台湾では値引き交渉したり、請求書の内容が正しいか確認しているシーンをよく目にします。日常生活で互いの意見を主張する機会が日本人よりも多いような気がします。

台湾のホテルの前でタクシーの運転手さんが猛烈に抗議しているシーンに出会ったことがあります。警官が二人も駆けつけていました。早口で運転手さんが何を言っているのか分かりませんでした。周りで見えていた人が仲間に話していた内容では外国人(白人)の客が車のトランクにも荷物を入れさせたのに降りる際に10元分の追加料金を払わないことへの抗議でした。警官は事情を知らない外国客だからあきらめろと説得しているようですが運転手さんは腹の虫が収まらず言葉の通じる警官に暫く抗議していました。

夜の台北の繁華街は日本と違って酔っ払いがいません。23回の旅行で一度も見かけたことはありません。日本人よりも酒の飲み方が乱暴な人が多いと思うのに。体質的に酒に強いのでしょうか？日本は都会だけでなく地方でも酔っ払いの醜態を目にします。台湾の夜はその分気持ちよく歩けます。

一度だけ龍山寺に近い康定路のホテルに泊まったことがあります。台湾も電柱には広告の看板が掛かっていますが、ホテル周辺の電柱には性病科、泌尿器科の病院の看板がやけに多いのです。後日万華育ちの友人に聞いたら[雨夜花]に描かれた世界があったことがわかりました。

サラリーマン氏が台湾に行き始めてからの14年間は台湾経済が高度成長した時期と重なります。最初の頃は大通りにも小さな建物が飛び飛びにありましたがいつの間にかほとんどがビルに変わってしまいました。小人国に行く途中の田舎の風景は西部劇に出てくる風景に似ていましたが2年前に久しぶりに同じコースを通ったらもう見つかりませんでした。

14年前はリヤカーのついた自転車が大通りを走っていたことがあったし、バイクに3、4人乗りしている光景が日本人には名物？と映っていましたが今では古い雑誌を探さなければ見ることはできないでしょう。冬でも日本に比べればずっと暖かいので今でもバイクが多いのは当然ですがほとんどの人がヘルメットを着用するようになっています。既にマイカー時代になっていて私の友人のほとんどが車を持っていますが、車の増加に駐車場の増加が追いつかずいつも駐車する場所を探すのに時間をとられてしまいます。台北以外はまだ地下鉄や環状線の鉄道がないので主要都市でも市内での移動は道路交通にほぼ100%依存しています。経済の発展レベルに対して交通

行政が大きく遅れていると言わざるを得ません。

経済だけでなく政治・社会も大きく変化し民主主義の社会になりました。

サラリーマン氏の語学力では聴いただけでテレビ番組の内容を理解することはできませんが幸い台湾の番組では字幕が出るのでそれを読んで大体理解することができます。14年前と比べると台湾語の番組が明らかに増えています。特にドラマは台湾語の方が多いのではないかと感じます。

連続ドラマは冒頭と終わりにそれぞれ別の台湾語の主題歌が流れることが多く、演歌好きのサラリーマン氏は主題歌が聴きたくてドラマ番組にチャンネルを合わせていると言えます。たまに主題歌が昔日本でヒットした曲で台湾語の歌詞になっているものがあります。民視というテレビ局で放送していた[情義]という連続ドラマの終わりの主題歌は村田英雄の[夫婦春秋]のメロディーに台湾語の歌詞がついた[人生]となっていました。さわりの歌詞が<我可比走馬燈、轉無停、轉無停>となっていて台湾語の歌詞もとってもいいなあと感心しています。

台湾のホテルではNHKの衛星放送が見られます。沖縄県全域で見られるようにすれば台湾でも映るようになるようです。日本の法律の及ばない地域ですので受信料は当然無料です。またホテルによってはケーブルテレビでNHKの総合放送もリアルタイムで見ることができます、こちらはケーブルテレビ会社がNHKから放映権を買っているそうです。

警視庁が上九一色村のオウム施設を捜索した時、貴乃花が優勝決定戦で武蔵丸を破った時は台湾のホテルのテレビで見ました。帰国する日の東京の天気はホテルでNHKの天気予報を必ずチェックしています。

台湾語の中には他の言語よりも日本語が外来語として採り入れられている比率が高いように思われます、と言ってもほんのわずかですが。最初に耳にした単語は[ウンチャン]でした、友人がタクシーの運転手さんにそう呼び掛けたのです。現在の日本では軽蔑した感じがあって禁句ですが台湾では元々の使われ方で生きているようです。[アニキ]、[アツサリ]もニュアンスが違いますが耳にします。[オジサン]、[オバサン]、[カンジョウ(勘定)]、[サシミ]、更に和製外国語や外来語の[アパート]、[オートバイ(オートバイ)]、[シャツ(シャツ)]、[リヤカー]、[トラック]、[ラジオ]、[パン]、[トマト]、[ビール]などを聞いたことがあります。勿論これらのうちほとんどは本来のミンナン語の単語もあります。ミンの漢字が私のワープロにないのでカタカナでしか書けません。

一部の新聞の横書きの見出しや一部のトラックの荷台に書かれた文字が右から左に読むようになっていることがあります。左から右に読んで行って途中でやっと反対に読むのだと気付くことになります。

サラリーマン氏が子供の頃は日本には戦前の右から左に読ませる看板がまだ結構残っていました。煙草屋さんの看板がひらがなで[こばた]と書かれていたので[コバタ]という姓の家だと勘違いしたことを台湾で思い出したことがあります。

言語人口上で少数派である客家の方は身内以外とは台湾語、北京語で話されているので、知合った後で何かの機会に客家だと聞かされてやっと知ることが多いです。小さい頃から家では客家語、近所の遊び仲間とは台湾語、学校では北京語と3種類の言葉を使い分けて来たとおっしゃる方が多いです。更に外国語も修得されていたりすると一体全体頭の中の回路はどうなっているのだろうと驚嘆、敬服します。

台湾は不幸にも人々の話す言葉が人為的に短期間に変えられることを証明する実験台になった国と言えます。それぞれミンナン語、客家語、先住民語を話していた人々が日清戦争後日本統治の50年間に日本語を強制され、日本の敗戦後は今度は北京語を強制されるという一世紀の間に2回も自分たちの言葉と異なるものを国語として強制されたこととなります。

言葉と文化は密接に関係している訳ですからアイデンティティを喪失しかけた、一部喪失してしまったという悲運を経験したこととなります。現在の若者たちの中にはそれぞれが属するはずの台湾語、客家語、先住民語が話せない者もいると聞きます。

100年前には現在ほどは国際的に大きな非難を浴びることではなかったのかも知れませんが、それは加害者側の弁明にすぎません。台湾固有の文化の喪失が少なくとも言語面では進行している最初の原因となった日本の行為に対して現在の日本政府が無関係を装いつけていることをサラリーマン氏は恥ずかしく思います。

日本が敗戦後連合軍(実質は米軍)が進駐してきた時に一部の日本人学者、政治家たちは英語を国語にすべきだと唱えましたが、日本人としてのアイデンティティを大切にすべきだという意見が圧倒的で今日まで日本語を国語として守ってきたのです。日本は台湾の悲運に最も責任を感じる国でなければ自分勝手と非難されても仕方ないでしょう。

サラリーマン氏がショックを受けたシーンがあります。確か1994年のNHK衛星放送だったと思いますが[台湾万葉集]をテーマにした番組で霧社事件の花岡一郎、花岡二郎を偲んで読まれた短歌に関係したものでした。当時少年だった先住民の方が霧社事件のエピソードを語られているシーンです。日本語で語っておられたのですが、その中に「蕃語」という言葉が出てきました。自分たちの言葉をそのような軽蔑された表現でご本人の口から出るなどとは予想もしていなかったのです。常に日本人から聞かされた言葉だったので自分たちが蔑視されたことになるにも関わらず思わず口から出てしまったのだろうと、とてもショックでした。

青島 京子

私が初めて「台湾」という言葉を耳にしたかという記憶は無い。
それ程遠い昔から心の奥底に積み重ねられていたという思いがする。
それというのも私の母が、子供の頃父親の仕事で台中に暮らしていて、台湾での生活や景色、台湾の人々の話など、しばしば語ってくれた為であることは間違いない。
子供の目には変わらないバナナも「これは台湾バナナだよ」と言って食べさせてくれたこともあった。
そんな記憶も心の奥にしまわれて日々の暮らしに忙しく、たまに行く海外旅行先も「台湾」と思うこともついぞなかった。
ところが、母が七十歳を過ぎた頃からしきりに台湾の思い出を語り始め、私も記憶を呼び覚まされた。
早速インターネットで台中についてのリサーチを開始。
しかし、台北の情報は多々ある中、台中の情報は皆無と言ってよいほどに無し。
とりあえず、夫と台北の旅に行ってみた。
何か懐かしい。
やはり幼い時の記憶のせいだと思った。
帰国後、インターネットで探していると、台中会のホームページを見つけた。
それからの話はとんとん拍子。
台中会の喜早さんの計らいで無事母を台中に連れて行くことが出来た。
これも縁と言うのか喜早さんのご紹介で母が住んでいたすぐ近くのご出身の劉さんを知り、大肚・沙鹿を一日かけてご案内いただいた。
母の通っていた小学校跡・近くの神社跡・通学通勤に乗り降りしていた駅・ガジュマルの木。母の忘れていた記憶もよみがえり、聞いたことの無い話も飛び出した。
本当に連れて行ってあげてよかった。
台湾には、日本人が忘れかけている暖かいものがたくさん残っている。出来ればもう一度母を台湾に連れて行ってあげたい。

最後になりましたが、お世話になった喜早さん・劉さん本当にありがとうございました。
又、出発前に沙鹿・大肚の情報を頂きました堀江さんありがとうございました。

台湾の狛犬

市来 訓子

私が台湾を訪れたのは、ちょうど新世紀を迎える年末年始でした。そのとき訪れた高雄の壽山公園で、思いがけない出会いがありました。それは、日本の狛犬です。獅子と狛犬は、まったく違うのですぐにわかりました。ガイドさんの説明で、そこが神社跡であったことを知りました。日本統治時代に神社が各地で建立された事は知っていたものの、まさか狛犬がこうやって今も無事に存在しているとは夢にも思いませんでした。狛犬は獅子の流れだからでしょうか。その後帰国してから、台湾の狛犬について調べ始めました。そして、中には穴を掘って埋めて隠し、混乱期が終わってから掘り出してまた設置したものまであるという話を聞いて、台湾の人たちがあたたかい気持ちで狛犬たちに接して下さっていたことに、大変胸が熱くなりました。壊されることなく、静かな余生を送る狛犬たちにどうしても会いに行きたくなりました。当時はちょうど、日本国内で量産型の狛犬と地方色豊かな昔ながらの狛犬がその立場を入れ替えてゆく時期にあたります。そんな時代、いったいどのような狛犬が海を渡っていったのか。据えられた土地に住む人々の出身地と関係はないのだろうか。そして再び、年末年始を使って台湾を訪れることができました。片倉佳史さんの名著「台湾日治時代遺跡」を片手に、狛犬を尋ねる旅です。今回の旅では5対の狛犬と会うことができました。それだけでも、獅子を狛犬として据えているもの、恐らく狛犬の資料に基づいて現地で彫られたもの、そして日本から運んだものと特徴が分かっていました。日本から運ばれたものは、量産型とは異なる、各地域独特のかたちを見せていました。もしかしたら、狛犬が据えられた地に住む人々の気持ちが反映されているのかもしれない。

私はこれからも、台湾に残る狛犬たちを少しずつでも尋ねてまわりたいと考えています。

井上裕子

夫の赴任期間も残すところあと1年となった今年3月、思い立って逢甲大学内の中国語センターに通いだしました。ここでは1日4時間、週に4日間、計16時間も勉強します。

私が入った5級の同級生は13人ほど、日本人は私を含めて5人、他にはインドネシア華僑の子、韓国人、アメリカ人、フランス人など国籍はさまざまです。皆10代後半から30歳くらいまででしょうか。私のような中年は同じクラスにはいませんが、他のクラスに数人いるようでした。

授業が始まると、とにかく先生の話す中国語が半分もわかりません。スピードもそうとう速いのでこれからどうなることかともものすごく心配でした。授業が終わったあと、先生に「先生のお話が5割もわからないのですが・・・」と言ってみると、「没関係！」の一言です。先生はどんどんあてて、教科書を読ませたり、文を作らせたりします。同級生たちは皆先生の話もわかるようで、なんなく文章も作っていきます。自己紹介の時に、大部分の人は來台1年くらい、と聞いていたのですが、2年もいる私とはなんたる違いでしょう。自分がとてつもなく劣等生のように感じておちこんでいました。

1週間たつと、まず体重が3キロくらい落ちました。（頭を使うから？）それから頭痛と激しい肩こりになやまされ、先が思いやられました。それでも予習などに力をいれているうちに、一月くらいたつと、不思議と先生の話が耳に入ってきます。100%は無理なのですが、8割がた聞き取れるようになったのです。その先生の中国語に慣れたということでしょう。ちなみに新学期になって先生が替わるとやはり聞き取れない部分がたくさんできます。慣れるまで少々時間がかかるのです。

單元ごとの小テスト、中間テスト、期末テストなどを経て、（実際期末テストはSARSが流行ったため自習休講し、受けませんでした）実力がすこしづつついてきているような気がします。同級生との雑談も当然中国語です。日本人の子でさえがんばって中国語を使ってみます。多少奇妙な中国語でも気にせずどんどん話します。またいろいろな人の中国語を聞くのはとても勉強になります。学校の他ではラジオを聞くのがけっこう効果的で、テレビは今の私にはまだ難しすぎます。作文のクラスでも一生懸命に頭をひねりながら書いてみます。先生はAをくれるのですが、家の近くの台湾人に見せてみると「子どもが書く中国語みたいで可愛い」と笑われてしまいました。

そんな風に学習していくと、語学の勉強はやはり「多聴、多看、多説」が一番の上達法というのが肌で感じられてきます。40を超え、記憶力の低下が著しい脳に鞭打ち、按摩で体をリフレッシュさせながら、残りの6ヶ月でどれだけ中国語が上達するのか、自分でも楽しみにしています。

太田 香

私が初めて台湾に旅行したのは4年前の台湾大地震が起こった1998年10月でした。台湾へ行く前はまさか、こんなに好きになるとは思いもよりませんでした。私は旅行が大好きで、そのほとんどが発展途上国と呼ばれる17カ国を今までに訪れました。大半は一人旅ですが、たまには共通の価値観をもった友人と行く場合もあります。旅のスタイルは航空券のみ購入し先々での手配は自分でするいわゆるケチケチ旅行です。よく「今まで行った中でどこの国が一番良かったか。」と質問されると、以前は即座に「ミャンマー」と答えていましたが、今では[台湾]が一番、次が「ミャンマー」と答えると不思議がられます。私の好みは通常女の子があまり行きたがらない国々が多い。反面、日本から3時間で行ける気軽さと、この国の人々の暖かい国民性がなんといっても魅力なのです。そして食、文化（夜市、健康歩道）等などでしょうか。

私が突然台湾旅行を思い立ったのは、旅行ガイドで高雄の「竜虎塔」の写真に目が止まり、私の胸をとどろかせたからです。それに加え、幸い高雄は大地震の影響を受けていなかったのも肉親や友人の心配をよそに1人台湾へ渡ったのです。するとどうでしょう。旅行中の6日間毎日台湾の人たちに親切にして頂いたのです。高雄駅に着き、さて宿を探そうとうろうろしていると、2人のおばさんがつたない英語で目的の宿を探してくれたり、その先でいろいろと-----。中国語が話せない女の子の一人旅を放っておけなかったのでしょうか。他国ではこんなに親切にされた経験がなかったので大変うれしかったのです。

以後、台湾を訪れるとなるべくお年寄りの集まりそうな公園へ行き、話しかけることにしています。お年寄りの方々から日本統治時代の話を聞くのも実に楽しいです。また、ある時はカラオケを楽しんでいるお年寄りにいきなり「青い山脈」を歌わされて、少し参ったことなどもありました。このようにして、旅行中に知り合った方々と文通でのやりとりが今でも続いています。

そして、中国語が話せるようになりたいと、中国留学を実行したのです。今では会話が通じ楽しみも倍増しました。そして、毎回、台湾を訪れる際に機内で今回はどんな出会いがあるかとワクワクしながらフライトを楽しんでいます。

私は台湾がたまらなく好きです。まだ台湾に行ったことのない人や台湾の方々の暖かさをまだ知らない人がいるのが残念でなりません。しかし、そう思う反面あまり台湾の素晴らしさを他人に知られたくない気持ちもあります。ハワイのように日本人でごった返す国にもなって欲しくないし-----。

また、台湾の若者、哈日族（ハーズ一族：日本大好き族）は最近の乱れた日本の影響を受けずに、台湾の純粹さを忘れないで欲しい、と私はつくづく思っています。

白山正士

皆さんは台北近郊にあるテレサテンのお墓を尋ねたことがありますか？

実はこの前の日曜日に友人を誘って台中から何時間もかけて行って来たんです。

「金山」と言う海辺の町の小高い丘の上にあるこの墓地は「金寶山」と言う名前がついており、ふもとから見ると大規模な住宅団地のような感じで、とても「墓地」とは思えません。この中の一角に「鄧麗君（日本名：テレサテン公園）」がありその奥まったつきあたりに花と写真と歌に囲まれたお墓がありました。

お参り（見学？）を済ませた後、管理事務所の受付の女性に

「墓地はいくらですか？海の見えるところがいいのですが」とたずねると、
「この墓地はすべての場所から海が望めるんですよ。

墓地の値段は坪36万元です」とのこと。なるほど、素晴らしい海岸線の景色が目の前に広がっています。

「この墓地なら場所もいいし、景色も満点、ここなら死んでからのんびりと景色が楽しめるが、それにしても、36万元とは高い！」と思いつつ、

「一坪なら私にも買える」と言う言葉が、
つい、口を突いて出てしまいました。

すると、かの女性が「一坪は狭すぎますよ。-----」

意地を張るようにわたし、

「大丈夫、わたしは<立って>眠るから一坪で充分」

このとき、わたしに大きな疑問が湧きました。それは、景色がこんなにいいのにみんなはどうして<上を向いて>眠ってるの？

<上を向いて>眠っているなんてもったいない！みんな

わたしのように<立って>眠ったほうがいいのにね」

するとすかさず事務員曰く

「<立って>いると疲れますよ（辛苦）！」

わたしも負けずに言い返しました。

「お釈迦様のように<椅子>に坐って海を眺めていればつかれない。

わたしの土地には<椅子>を用意してください」

ふと見上げると目の前に<海に背を向けて><椅子>に坐っている

お釈迦様が、そしてかのテレサテンは椅子に坐らず<上を向いて>静かに

眠っていたのです。

翌日会社の人（台湾人）にテレサテンのお墓の話をしたら

「それは違うよ。夜になるとみんな立ち上がって、みんな海を見ながらテレサテンと一緒にカラオケを歌ってるんだよ。」

「えー？そうだったのか。

そんなら次は夜中にテレサテンのお墓を尋ねてみたーい」

父の友人～黄再興さんを語る （高橋俊貴）

父の友人--黄再興さんを語る

父（日本人：大正15年生まれ）は、旧制成田中学在校時代に、台湾からの留学生黄再興さんと共に学び又祖母の家で共に生活をしていました。当時兄弟のように 学生生活を楽しく送っていたものの、第二次世界大戦が勃発し父も最後の赤紙で陸軍へ、又黄さんも自ら志願し海軍へ入隊しましたが間もなく終戦となり黄さんは、実家がどうなっているのか心配で故郷の台湾へ帰る事を決めて日本の家族である祖母や父に相談をしましたが、日本兵として戦った者が今台湾へ帰ると迫害に遭うんじゃないかとみんなで必死に引き留めたようですが、黄さんの意志は固く台湾へ帰国する事になりました。黄さんは帰国するにも戦後直後で金も無い、金が有ったとしても台湾行きの船が有るかどうかも分からない状況だったようですが、戦前は神戸から台湾への船が出ていたようで、とにかく神戸へ行ってみると言うので親類縁者が有り金を集めて持たせたそうです。

その後、台湾から黄さんの父上から手紙が届き、お礼が書き述べて有ったそうです。それからは、偶に連絡を取り合う程度の付き合いになったのは、いた仕方のないことでしょう。今から二十五年位前に父が職場（成田高校教員）の旅行で台湾へ渡り、日月潭で黄さんと三十二年ぶりの再会を果たしました。側にいた同僚も含め台湾の方々も大の男が抱き合っ泣きじゃくっている姿を見て不思議がっていたそうです。

父は私に、台湾に旅行に行つて兄弟に逢つてくるつていきなり言いましたので、兄弟はみんな日本にいるし旅行にも行つていないので、急に親父呆けちゃつたかと心配になり話を聞くと黄さんの話が出てきました。それまでは、全然聞いたことが無く驚きましたが凄く感動を覚えました。黄さんは、三十数年前に覚えた校歌を一字一句間違えずに日月潭の岸で大勢の職員、父と共に沈みゆく夕日を見ながら唱つたそうです。

何年か前に台湾中部で大地震が起きたとき、毎日毎日黄さんに連絡を取り続けましたが取れづじまいで意気消沈してしまい心配な日々を過ごしていましたが、昨年11月に台湾の方々の協力を経て南投縣南投市に在住しておられる事が分かり久しく連絡の取り合える状況に感激しております。父も年齢的に体調がすぐれないので私が先ずお会いしに行くこととなり、祖母、父の写真を持ッていき昔話に終始しましたが、昭和33年生まれの私には、当時の成田の様子や人々の優しさや親切な心に触れて良い思い出で今も一杯で、成れるものなら日本人に私はなりたかつたと話しておられましたし、貴方の祖母は命の恩人だが、お墓も参りをしていないので、このまま死んでしまうのは悔いが残るので近い内に是非とも日本へ行きたいと泣いておられました。今年2月上旬と4月下旬にご自宅にお伺いする事が出来ましたが丁度SARS患者が急激に増えつつある頃でしたが南投市では、マスクを着用している人も見かけず大したことじゃないと安心して帰国する

と父宛に手紙が来て、至急マスクを用立てて欲しいとの事で私が送ることになり、今後は私共々お付き合いをさせていただいております。

黄再興さんは草屯付近に昔お住まいで、「祖父が有名な方で銅像が建っている。日月潭へ行く途中の道の両側は、以前は見渡す限り家の土地だった。」と言っていました。私の台湾との出会いは、昨年7月に訪台して以来6度目を迎え今月か来月中に「台湾へ帰れ」そうです。普通なら「行けそう」と書くのですが、20年か25年位前の日本に出会えるからです。人々の暖かさや些細なことに腹を立てずお年寄りや子供を守る姿を目にしました。今の日本は、何を見ても知らぬ振りで子供が騒ごうものなら怒鳴られるし、冷たい人情味のない国に変貌していますが台湾の特に田舎は、自分の故郷にいるような心地よい雰囲気があり大好きです。将来出来うる事なら台湾に住みたいと考えております。

乱文で読みづらいかと思いますが、頭に浮かんだ事をそのまま書きましたのでお許し下さい。

父＝千葉県成田市在住 高橋 清（77歳）

私＝千葉県成田市在住 高橋 俊貴（45歳）

ベストフレンドとともに台湾留学記（高橋美代子）

高橋美代子

ベストフレンドとはわが夫である。49歳の時に脳梗塞で、定年直前に脳内出血と二度倒れた夫は、当時歩行困難の為に車いすの生活だった。私たちは日中友好の為に少しでもお役に立てばと、中国語を学び、中国への関心を深めてきた。言葉を覚えるには、中国に住んで勉強するのが、一番の近道ではないかと考え、色々と調べた末、三年間台湾に留学することにした。車いすの夫を連れて海外での生活には多少不安もあったけれど、何とかなるだろうと鞆一つの出発となった。

留学なんて言うと聞こえはいいけれど、早い話何処にでもある語学教室へ二人して通っていたのだ。学校の近くの小さなマンションの一室を借りて、毎朝きちんと学校へ週五日、午前中二時間北京語を学ぶ、帰りはあっちこっち歩き回り台湾の食文化を楽しんだ。朝晩近くの公園で太極拳や新体操をやっているの、私も毎日参加し、一時間汗を流し、近所の奥さんとだいぶ仲良しになった。

台湾は中国の一地域だと日本も世界も認識しているようだけでも、台湾の人々の気持ちはまるで違うような気がする。台湾の人たちは中国に対して相当距離を置いていると思う。教育レベルも高いし、経済も発展している。また民主化も進んでいる。「独立」と言う言葉が常に底辺を流れているような気がする。「私は台湾語と日本語以外は絶対に話さない」と中国に対する敵意をむき出しにした老人もいた。かと思うと、私の塾の先生のように「私の父は大陸生まれ、母は台湾人。どうすればいいの」と悲しそうに話されていた人もいたのだ。

忘れられないもう一つ大きな驚きがあった。台湾の中に日本人がいたのだ。彼らは生まれた時から日本人として育てられ日本の教育を受けている。台湾で国語と言われている北京語はよくしゃべれないけれど、日本語は自由自在だ。日本人でも忘れかけている、童謡や数え唄などよく知っている。元気なうちに日本へ行きたいと涙ぐむ。日本は50年もの長い間、台湾を統治していたのだから仕方がないのかもしれない。台湾の人々の複雑な思いを、あまりにも知らなさすぎた気がしてならない。

車いすを押して歩き回っていたせいか、数え切れないほどの親切を受けた。さりげなく積極的なあの優しさは、どこからくるのだろう。特に若者の親切が多かった。

台湾大地震にも大水害にも遭った。総統選挙では台湾中が熱く燃えた。私たちにとってかけがえのない三年間であった。

結婚生活40年を迎える人生の中でもひとときわ鮮やかな金の思い出をきざむことが出来た。本当に勇気を出して、行動を起こしてよかったと思う。

「そろそろお世話になった方たちに会いに行きたいね。」と我が友と話している昨今である。

東京都：中尾美和

私が初めて台湾を訪れたのは3年前、留学先で知り合った友人に会いに行ったのがきっかけです。すぐに心地よい懐かしさを感じ、マグネットに引きつけられるように、台湾が大好きになりました。それは、きっと現地で偶然出会った人々の温かさに触れたからだと思います。

昨年暮れに再び訪台し、前半は台北、後半は友人が住む台中に滞在しました。彼の仕事があった日は、ひとりで気の向くままに台中の街を散策しました。台中で、木造建築が美しい茶芸館に立ち寄った時のことです。私は芳しい香りの台湾茶でくつろぎながら、次は国立自然科学博物館へ行くことにしました。2度目とはいえ、土地感は薄く、茶芸館で行き方を尋ねました。女性スタッフに中国語と片言の日本語で教えてもらいながら、近くに博物館方面へ行くバス停があることはわかったのですが、具体的な位置までは理解できませんでした。すると、彼女は私をバス停まで連れて行ってくれたのです。恐縮しつつお礼を言って別れてから5~6分後、視界に再び彼女の姿を見つけました。その日は月曜日で、ちょうど休館日だということを伝えに来てくれたのです。街路の喧騒とはまるで対照的に、彼女はとても静かに、ゆっくりと歩いてきて、優しくそう教えてくれました。そして、同じ調子でお店へ戻っていく後ろ姿を見ながら、嬉しくて、安らかな気持ちになったことを覚えています。

台湾では、そんな優しい出会いが他にもいくつかありました。歩道で地図を見ていたら、いきなりバイクを停めて、

「少し日本語がわかります。どこへ行きたいのですか？」と道を教えてくれた婦人...

懐かしそうに日本語で話しかけてきた老夫婦...。 駅で、何気に私が切符を買えたかどうか見届けてから去って行った女性たち...等々。

即座に私が日本人だと判かってしまうのは不思議でなりませんが、台湾人のおおらかなホスピタリティに引き寄せられて、また台湾へ戻りたいと思ってしまうのです。

1997/04

僕の生い立ち

春雨の早朝、古びた家系図をめぐってみれば、14世代林篤信が渡来の祖先で、清朝の嘉慶時代に福建省洲府平和縣から、台湾の彰化縣閩帝と言う所に移住した40歳の頃、当地で結婚し、農耕に従事してよく働いたので田地を買い暮らしも落ち着きそして3人の男児をもうけた。その3人の兄弟は仲良く家業の農業を受け継ぎ益々励んだので田地も増えたが、ある日隣人と水田用水の紛争を起し、その隣人と打ち合っているうち、相手が気絶してしまったのでびっくりし、兄弟3人で老婆を背負い林圯埔(今の竹山)の猪頭粽という田舎に逃れた。

ここで又土地を開墾し稲づくりを始めその傍らに山の杉を伐採して桶造りと桂竹で紙づくりをやり又商売もしたので生活は楽になり子孫もだんだん増えたという。

やがて時は移り変わり、日本統治時代になった。17世代のお祖父さん林勇は小地主となり、地方でも人望が厚く警察署から保正(部落の長)に指名された。そして猪頭粽で福洲杉造りの立派な邸宅を新築した。この邸宅を「元正邸」と名づけ、その名は一層地方にも響いた。

その次男が父で、僕はこの新宅(台中州竹山郡竹山庄猪頭粽124番地)で生まれた。お祖父さんには三人の息子がおり皆一緒に暮らしていた。僕は長男であるがお祖父さんの男の孫としては3人目であったので「啓三」と名づけられた。

僕は幼時を元正邸で過ごし、7歳のとき竹山公学校(国小)に入学した。公学校本科は6年制で全部日本語で、国語、修身、算術、地理、歴史、図画、唱歌、体操等が主な課目で、先生は日本人と本島人(注:日本時代の台湾人のことを指す)の師範学校卒業の方であった。僕は本科を優等生で卒業し、高等科に進んだ。高等科は2年制で先生は日本人、この八箇年の日本教育を受けて日本語の基礎を固め知識もだいぶ吸収した。

家の本業は農業であるので、当時の名校「屏東農業学校」を志願、一人で試験を受けに行った。その十数日後合格の知らせを受けたときは非常にうれしかった。そして屏東農業学校で普通学科と技術学科に学び、五カ年の過程を終えた。時は1943年の12月末であった。

(戦争のため3ヶ月短縮で卒業した)

この頃はもう戦争中となり、僕は卒業前に三井農林会社職員の試験を受けて1944年1月三井農林会社の台北支店に就職した。この間台湾に徴兵制度がしかれ、僕は徴兵適齢者の一人として徴兵検査を受け第一乙種合格で1945年(日本終戦の年)2月1日に鳳山の敢部隊に入営した。その部隊で初年兵教育後、幹部候補生を受けたが終戦となり、当年9月3日除隊し竹山の郷里に戻った。

中華民國はアメリカのおかげで戦勝国となり、1945年10月台湾を接收したのである。かくて1945年10月25日午前10時台北市公会堂で降伏式典があげられ、その直後陳儀行政長官がラジオ放送で台湾は中国の領土に復帰し、本島人は一律中国国籍に変更するという宣言のもとに 国籍は変わったのである。

2 僕の軍隊経験

昭和16年（1941年）12月8日に勃発した大東亜戦争（アメリカは太平洋戦争といっているが）18年頃から戦局は緊迫し、人的、物的消耗は厳しくなった。台湾では皇民化運動が進み、本島人も日本人として権利と義務を平等に付与するという美名と、兵員の不足補充のためか 昭和19年(1944年)本島人に対し、徴兵制度が施行された。

大正14年(1925年)1月8日生まれの僕は台湾第1回徴兵の適齢者として、徴兵検査を受け、第1乙種合格で徴集され昭和20年（1945年）2月1日の鳳山の敢部隊に入営した。そして日本敗戦のおかげで当年9月3日に除隊、故郷の竹山に無事戻った。このように日本が台湾で徴兵を実施したのはたった1回で終わった。

僕は屏東農業学校卒業後、三井農林会社に勤務していたが徴兵令を受領した20年の1月末に原籍地の竹山に戻り、郡役所に出頭してからみんないっしょに出発した。出発前父から「軍隊に入ったら万事程よくやり、決してでしゃばるな。」と注意された。

2月1日の夕刻、鳳山の部隊に入営し、翌日新しい軍服、軍帽、軍靴、下着等受領した。三日目部隊のトラックに乗り南に向かいの駅前下車し、又南へ進んだ。今度は行軍である。そして夕刻枋山に到着、民家の空家で一夜の休息、翌朝枋山を発ち午後楓港から東の山脈の方向に行軍し始めた。これでは中央山脈を超えて台東方面へ行くものらしい。兵は何もわからない。ただ命令どおりに行動すればよいのだ。夜は牡丹社の学校で一泊、次の日寿峠を越えれば太平洋は眼下に現れた。初めてみるこの太平洋は黒く荒れている。風も強い。これから先が思いやられる。

続く行軍で、新兵は落伍者が続出、僕は学校教練を受けているので、この行軍には耐えることができた。しかし数日後連続行軍のため腿が堅くなり、足は思うように運べなくなった。「足が棒になる」とはこのことかと痛感した。

新兵が更に北上する次の宿泊地は大武そして太麻里、知本を通り台東に到着した。台東女学校の運動場で敢1787部隊各中隊の人事係准尉と下士官が各々の中隊に適する兵を選考し、必要兵員だけまとめて連れ去る。僕は歩兵砲中隊に選ばれた。見ればみな体格の良い者ばかり。残った兵はことごとく小銃隊に廻された。

歩兵砲中隊編入の兵は、准尉の指揮のもとに又北上し、卑南を通り、日奈敷の中隊駐屯地に向かった。途中「台湾軍の歌」を大声で歌ったからか到着後、僕は選ばれて新兵を代表し山田中隊長に入隊の申告をした。

太平洋の空遠く 輝く南十字星
黒潮しぶく 椰子の島
荒波吼ゆる 赤道を睨みて
立てる南の護りは我等台湾軍、
ああ敵として台湾軍

歴史は薫る五十年 島の鎮めと畏しくも
神去りましし大宮の 流れを受けて蓬萊に
勲を立てる南の 護りは我等台湾軍、
ああ敵として台湾軍

いよいよ翌朝から初年兵の訓練が始まった。初年兵の基本教育は白石兵長、高橋上等兵があつた。各個動作から団体行動、小銃（三八式歩兵銃）の操作等で中等学校出身者は学校で習得済みなので動作が熟練しているが、公学校出の新兵はなかなかうまく操作が出来ない。

台湾本島人の徴兵はこれが最初なので、台湾軍司令部から特に体罰は控えめにするよう達しがあつたとか、僕の見るところでは訓練中の不合理な制裁はないが、しかし内務班では時々不始末な古兵から叩かれることはあつた。

日奈敷の兵舎は台東の北方約10 km先にあり、蕃社の隅にあつた。歩兵砲中隊は速射砲（口径僅か37 mm）小隊と聯隊砲（山砲）小隊に分けられている。更に前者は八部隊、後者は二部隊に分けられ、一部隊の人数は20数人、伍長が分隊長、僕は速射砲の第五分隊に配属された。

分隊長は岩男伍長、中隊の兵舎は仮兵舎で藁葺きに竹の柱、竹の寝床、地面は土間という簡単なもの、兵舎は周囲にあり中央の空き地は野菜畑、右側に坑道があつて砲をしまっている。

日奈敷での初年兵の訓練が二週間経った頃、中隊は動き出した。今度は南に向かう、知本、太麻里そして大武に進む。入営時とは逆のコース又中央山脈を越えて西部に進むらしい。今度は若干の装備もあるので入隊時のような身軽ではない。行軍は夜間が多い。米機の空襲を避けるためと思う。大武から寿峠、牡丹社、楓港、枋山を通り枋寮に着く。ここで汽車にのり台北州の樹林駅まで、下車すればまた行軍、北西に向かう。夕刻林口台地の公学校に部隊は一応落ち着く。その後わが歩兵砲中隊は湖子の製茶工場に移動し、その二階の萎凋室を借りて兵舎とした。

ここでは、「挺身奇襲」と速射砲の操作の訓練、教官は岩男分隊長である。林口台地は広い茶畑のある所で地面は粘り気の強い赤土、この茶畑の中に無数の「蝸壺」が掘られてある。この蝸壺の中に隠れ兵はガソリンを入れた酒瓶（火炎瓶という）を持ち、近くまで攻めてきた敵の戦車のキャタピラの前に投げつけ火災を起こさせる戦法である。

次は本職ともいふべき37速射砲の訓練である。速射砲は別名「直射砲」ともいわれ、速やかに移動し敵の戦車や上陸舟艇を直射するのが目的で弾には鉄甲弾と手榴弾の

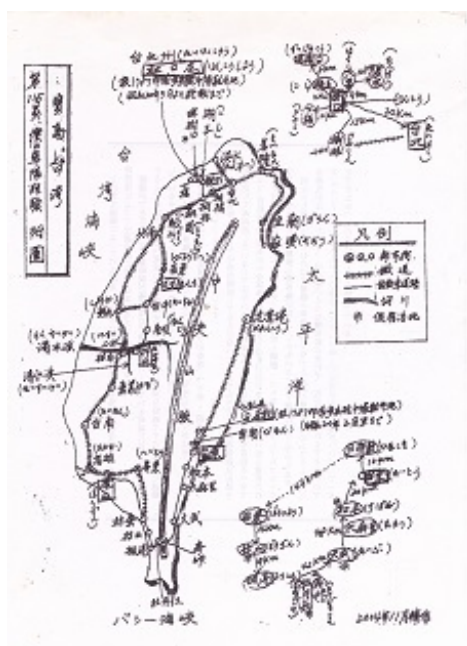
二種類がある。先ず砲の各部門の名称, 操作、点検要領、作戦要領等を訓練する。
成績の良い者が砲手になり其の他は弾薬手となる。

砲の平地での移動は兵が肩にベルトをかけて引っ張って進むか或いは馬か牽引車で移動する。しかし我が中隊には牽引車は一台しかない。次に山地に入って移動する場合は砲を「分解搬送」する。そして速やかに次の目的地にはこび組み立てて据え付け戦闘を続ける。この分解搬送は兵がそれぞれ分解した砲の部分、即ち砲身、砲架、車輪、脚等かついで移動するが一番軽い部分でも40kg位はあり、体力の充分でない僕は一番苦手であった。

また次に苦しかったのは「匍匐前進」の訓練である。林口台地は赤土で粘っている。この上を這って爬虫類のように進めば胸から脚まで泥だらけ特に雨の後は泥人形そのもの、この苦勞を厭わぬのもお国のためか。ここで内務班に帰った時、古兵達の歌っている歌を思い出した。

連射砲の兵隊さんにや娘が惚れる
惚れちゃいけない苦勞する
苦勞は厭わぬお国のためだ
わたしゃ待ちますいつまでも

広い練兵場に黄昏迫る
今日の演習も無事でした
泥にまみれた軍服脱げば
かわいいあの娘のマスコット



我が人生を時の流れに（2）

3月中旬頃か、我が歩兵砲中隊は湖子の茶工場から発って、台地を降り、瑞樹口という所に駐屯地をかえる。中隊本部は集会所を借りるがあとの兵舎はなく、兵が建てなければならない。あいにく最初の一夜は大雨で雨露をしのぐ所もなく兵は濡れ鼠同然、しかし訓練を受けたお蔭か風邪を引いた兵はいなかったようだ。

職人出身の多い我が中隊の兵であるので、竹の柱で藁葺の仮兵舎を建てるのはお手の物、兵舎は数日後に完成した。

僕は本島人出身の兵の中から選ばれて中隊本部付となり、連絡と文書事務をとった。中隊長は田中中尉に更迭する。この隊長は若く気が荒い。よく兵を叩く。中隊には年配者を召集した第二国民兵がいるが若い兵隊や下士官は彼らを馬鹿にしている。僕の知る一人の老兵は嘉義農林学校の教諭だったが肥しかつぎをし、野菜づくりをさせられている。これは無意味で国家の損失ではないのか？

4月頃から戦局は緊迫しつつあるかのよう、中隊の各分隊は陣地構築と訓練を強化した。僕も下福の分隊に派遣され、昼は樹を切り、坑木を運び、坑道堀の作業と砲架の強化改善作業で忙しい毎日で夜は壕の中で寝ることもしばしばあった。

我々の敢部隊は陣構部隊で決戦部隊ではないと耳にしていた。兵は工事には熟練しているが、その反面戦闘には強くないようだ。その上砲は古い。僕は入隊中実弾射撃を見たことすらない。今にして思えば榴弾で敵を倒すことは出来ても、鉄甲弾で米軍の壁厚い戦車を貫くことは到底不可能だろう。皇軍の精神訓練は充分といえるが近代戦において精良なる武器との組み合わせがなければ、勝利は勝ち取れないだろう。

幸いにしてマッカーサーの反攻軍は台湾を飛び越して沖縄を攻略したので台湾は戦火から免れた。彼らは日本本土攻撃へ早道を取ったのだろう。台湾をフィリピンの次に攻めたら損傷は莫大で時間もかかっただろう。

台湾軍20数万は無傷のまま昭和20年8月15日天皇の無条件降伏の玉音を聞いた。今までと違う不気味な沈黙の中、その一日三大隊本部に兵は集結し、軍旗の焼却式があった。僕ら台湾出身の兵は、9月2日新しい軍服と軍靴に若干の米、砂糖を渡され、翌日の9月3日に帰郷が許された。所謂軍隊地獄から娑婆に戻れた喜びは筆舌では尽せない。

戦友よさようなら！さようなら！また会う日まで！！

駐屯地の林口庄から皆台北駅に向かって走った。瞬く間に台北駅に到着、軍用列車でそれぞれの故郷の近くの駅まで送ることになった。僕は二水駅で降り、濁水溪の鉄橋から清水溪を渡り故郷の竹山街猪頭粽の我が家に夕刻辿りついた。両親や親戚の喜び又とあろうか。思えば僅か7箇月という短い軍隊生活であったが事実よりずっと長い月日という感じであった。

この軍隊生活は一生忘れることの出来ない貴重な体験であった。日本は敗戦した。しかしただひとつ日本政府に叫びたいことは元日本籍だった台湾人日本兵が戦後中国の行政長官の一方的宣言によって中国籍に帰したものの、そのために日本から見放される一方、お前達は曾て祖国軍に対し銃を向けた不屈者として、中国からも除者扱いにされ、いわば孤児的存在となった僕らに対して暖かい言葉をかけてくれたことがあったろうか？この道義的責任を日本国会に訴えたい！！

1. 終戦後の人生と経験

入営前の僕の職業は三井農林会社台北支店三叉事業所の準社員であったが農場係であった。戦後の昭和20年（1945年）9月、今までの職場はまだあるだろうかと台北支店に出頭して伺ったら、元通りの三叉事業所に復員するよう指示されたので事業所に戻った。三叉事業所では兵隊帰りの竹下康雄所長、山口則夫さん、今野悦紀さん、同僚の陳水城君、謝鴻順君等復員しており喜んで迎えてくれた。

これからまた事業はどう始めるのか？敗戦で日本系の会社はやがて中国政府に接收されるそうで、日本人の職員は帰国の準備であわただしく仕事をする気配もない。暫くはまごつく毎日であった。

当年（1945年）10月25日台北で受降式があり、その直後、国民政府から派遣された行政長官陳儀氏がラジオ放送で台湾の中国復帰と台湾人は国籍が中国となるという宣言があった。この後間もなく長官公署から林清義氏を接收委員として我が三叉事業所に派遣してきた。会社は農林茶業公司として発足し、どうにか事業を始めまた紅茶の栽培と製造を始めた。又造林地も管理を続けたが、この時警察力もなくなり、盗伐が甚しく、職員の方では防止も出来ず、その為盗伐され放題で山林は荒れてしまった。

その後会社は台湾省茶業公司となり所有していた水田は縣政府に、山林は林務局にそれぞれ移交を命ぜられ、会社は専ら茶業の経営のみとなった。しかし会社の経営方法は直営でなく、茶園を農民に貸し付け、年収若干の租税を生葉に換算して納入させ、その他の生葉は時価によって買取し、それで製茶をする方法であった。その為時価査定がいざこざが絶え間なく生葉の品質は落ちる一方で、したがって紅茶の品質もだんだん悪くなった。

この非合理的な経営方法をする会社に諦めて、僕は戦後の4年目に会社を辞して故郷の竹山区署(元郡役所)に転職した。ここで公務員として再出発することにした。

中国の公務員は先ず、中国文と中国語がうまくなければならない。僕等は完全なる日本教育を受けてきたので、この基礎はない。総て在職中の独学と補修に参加する外はないから苦勞をする。中国の政治は文学政治とも言われているくらい文書の格式を重じている。公文は古典的で格式ばり、そして長たらしく効率に欠けている。近年になってから改革されたのは良いことである。

大陸から来た連中は婚姻関係や同郷人の誼みを利用して高官や有利な職位について一攫

千金を目指している。彼らは一般的に法螺吹きで実力がなく暇があれば公金を横領して私服を肥やす。台湾のために尽くすということは口先だけで本心は毛頭ない。

これは日本教育を受けた僕らにとっては許せないことである。因みに本省人(本島人)には高官は少なく殆どが中下級の公務員で職場を忠実に守り確実に仕事をして来て、台湾の安定と発展の基礎を固めてきた。

この安定の上に胡座を書いた外省人(戦後中国大陸から来た連中)は台湾の甘い汁を吸って楽をしている。彼ら曰く「3年の官吏なら2年で私腹を肥やす」という。台湾の官吏は日本時代から2、30年も長い間勤めているから巨大なる財産を獲得しているのではないかと考えられている。僕等はあきれて言う言葉もない。このような腐敗した中国の官吏がおるから戦後大陸の国民政府は国民に見放され、4年足らずで中共に全面とられたのではないか。

僕は区署(郡役所に相当する臨時的な役所)で1年ばかり勤めた後、小縣制の実施により大台中縣は4個の小縣市に分割自治することになり、南投縣は南投、能高、新高、竹山の4区をもって成立した。縣庁の所在地は南投鎮に決まり、南投縣は1950年(民国39年)10月に発足した。これによって僕は南投縣政府の職員となり、竹山から南投に移住した。

これからが僕の本当の公務員としての出発である。所属は建設局の農林水産課で僕は特用作物の増産普及と奨励を担当することになった。当縣の特用作物は甘蔗、黄麻、パイナップル、バナナ、お茶、柑橘等、種類はきわめて豊富で僕の趣味に合致していた。これは僕の幸せと思う。この間、関係技術の講習に参加したり、新書を買って勉強したり、先輩の教を請うたり、僕は弛まず努力を続けた。

特用作物の栽培管理の技術は勿論、生産物の検査、特産品の宣伝販売に至るまで一通りは習得できた。この内、特にお茶の部門は三井農林会社で習った技術を基礎にし、その上、茶業試験場で勉強し、お茶の栽培と製造及び販売等を農民に指導奨励した結果、極めて良い成績をあげることができた。特に凍頂茶の品質改善、販売促進等はその名声と實際的収益をあげ農民を豊かにした実績は自分としてもやりがいがあったと思っている。

今の若い公務員は少しでも良い職位があれば、しきりに職務移動を働きかけ、転々と廻る。その結果、よい職務にありつき、収入も多くなるが、何一つ専門的な所がない。しかし僕は自分の理想に合った職場であれば敢えて変更することを望まず、長い年月をかけて努力を続ける方針でやっているのです。月給もあまり増えないがそれゆえ専門的技術を身につけることができた。いざ定年退職になっても、在職中の経験を生かす事ができるので結構な事事もたくさんあって退屈せず健康である。

僕は退職後もお茶の品質鑑定を続け、ツバキづくり、農業関係の著作や翻訳、歴史性のある古写真をまとめて本としたり、又台湾の農会と日本の農協との姉妹クラブ提携を助成したり良き友達も沢山あって毎日楽しく暮らしている。70歳を上回った今も出来るだけ頭と体を使うことが健康への最良の方法と信じその止め処を知らない。

烏龍茶愛好者の皆様へ

今、台湾の烏龍茶は健康と美容に効果のある飲み物として脚光を浴び大きなブームを呼んでいます。烏龍茶の別名は「減肥茶」とも「窈窕茶」（ようちょうちゃ）ともよばれています。「減肥茶」とは文字どおり「痩せる」お茶です。窈窕茶の窈窕とは、しなやかな女性の姿を形容し、いわば「スマート」になるお茶というほどの意味です。

またコレステロールや中性脂肪を取り除き、しかも癌（がん）や中風の予防もできる烏龍茶の効用は、最近改めて認識されました。

烏龍茶の産地は台湾と中国の福建省に限られております。台湾の烏龍茶の原種は約200年前対岸の福建省から持ち込まれたものですが、台湾中部の山手地方が最も栽培に適しております。これは気候・土質等の先天的好条件と日本統治時代から戦後にわたって長い年月をかけた、品種改良と製茶技術の改善によってお茶の品質が向上し、原産地に勝る風味を作り上げました。

特に南投縣鹿谷郷、凍頂地方の烏龍茶が台湾最高級のお茶として一般に認められました。

◆お茶の種類と特徴

台湾で生産されるお茶の主なる種類は「烏龍茶」「包種茶」「緑茶」「紅茶」の4つです。これらのお茶の種類と特徴を申し上げますと、

- 1 烏龍茶は強い発酵茶（発酵程度45～55%）で市場では「自毫烏龍」「香賓烏龍」「東方美人茶」といわれて、独特の風味を持っています。
- 2 包種茶は弱い発酵茶（8～25%）で市場では「文山包種茶」「凍頂茶」「明徳茶」「阿里山茶」等が有名で特に香りよく、味にまろやかな特徴があります。
- 3 緑茶は不発酵茶で市場には「龍井茶」「眉茶」「碧羅春」「煎茶」等があり、特に新鮮な香りと味があり、またビタミンCを一番多く含んでおります。
- 4 紅茶は全発酵茶（98～100%）で市場には“日月紅茶”“東邦紅茶”“鶴岡紅茶”などがあり、香りが強く、茶汁の色は鮮紅色で味も濃く、その品質は原産地北インドの紅茶と並ぶことが出来ます。

烏龍茶と包種茶は同じ発酵茶で一般の方々には区別しにくく台湾の市場や世界の市場でも烏龍茶として呼ばれております。

◆凍頂茶の特徴

凍頂茶は発酵程度が10～25%くらいで弱い発酵茶です。市場では“凍頂烏龍茶”という名称で売り出されています。凍頂茶は独特の清い香り

(ぎんもくせいの花の香りに似ている)とまろやかな甘味をかねそなえた逸品です。

生葉の摘み方は、この香りと味の要求に合わせて、二葉掛けを3分の2、一心二葉掛けを3分の1含む割合の時、その若い芽と若い芽を手で丁寧につみます。

摘み取った生葉は速やかに製茶所にはこびお茶作りを始めます。まず、日光萎凋(いちよう)から室内静置萎凋、攪拌(かくはん)、釜入れ、揉捻(じゅうねん)へと進みます。そして第一次の乾燥の後、静置すれば第一日目の仕事は終わります。翌日、この製造中のお茶を加熱し軟らかくしてから整形揉捻をやり、第二次の乾燥で水分を5%くらい含む程度にしたのが“荒茶”です。荒茶は手作業で茎を取り、篩で粉末を落としてから焙籠或いは電子乾燥機で仕上げたのが“精製茶”(商品)です。

精製茶は外観が半球系でよりが締り、黒緑色で光沢があります。立てたお茶の“水色”(茶汁の色)は蜂蜜のような黄色で澄みきり、凍頂茶独特の香りと味を備えたものが上品です。

凍頂茶は毎年4月頃から11月頃まで生葉を摘みませんが、春茶・夏茶・大小暑茶・秋茶と冬茶の5つの季節茶に分けられます。各季節別のお茶の品質について申し上げますと、春茶は香りと味ともに優秀で、夏茶と大小暑茶は茶汁は濃いけど渋味のつくのが欠点、冬茶は一番香りが高く茶汁は薄めですが貯蔵のきくお茶です。秋茶の品質は夏茶と冬茶の中位です。

◆ 凍頂茶の選び方

一般に値段の高いお茶、或いは高い山手で作られたお茶ほどよいお茶だと思われがちですが、それは必ずしも正確ではないのです。ではどんなにして凍頂茶の良否を見分けるか次に述べてみましょう。

まず、最初にお茶の外観を見ます。良いお茶は形が整ってよりがよくなって半球形になり、葉と茎は連なっていて、持ってみて重みのあるのが良いお茶です。黄褐色の茎のついたものや、黄色い葉、茶末の多いものは良くありません。

良いお茶は色沢が黒緑色で光沢があります。葉が灰色、黄色、褐色のもの、持ってみて軽い感じのものはよくありません。

次にお茶を立ててみます。

よいお茶の茶汁は色が蜂蜜のような黄色で透明な光沢があります。茶汁が濁っていて茶碗の中に茶殻が多く残っているものはよくありません。また茶汁の色が赤色、緑色の濃いものもよくありません。

その次に一番大事なものは香りと味です。

立てたお茶の香りをかいでみます。清純なるお茶の香り(ぎんもくせいの花のような香り)を何回も感ずるものがよく、不純な香りや青臭い香り、焦げた香り、花香をつけた香りはよくありません。

それから茶汁を口の中に含めて味を確かめます。

凍頂茶本来の味は新鮮で独特なまろみのある爽快なる甘味を含み、飲んでみるとのどを潤し、甘味が口の中に長く残り後味の消えないのが上品です。青臭い味、渋味、青臭味やお茶以外の味がついているのはよくありません。

◆ 凍頂茶の立て方

適切なお茶の立て方は、お茶の種類、品質の相違、各個人の嗜好等によって少々違いますが、ここでは一般に広く応用されている「工夫茶」又は「老人茶」といわれているお茶の立て方を説明します。

● お茶を立てる3つの要点

(1) お茶を入れる量

もしいちどに4人分飲用するお茶を立てるなら、容水量150ccの茶瓶(急須)に容量30ccくらいの大きさの小茶碗を使います。この茶瓶にはお茶の葉を8~10g程度(容水量の20分の1~15分の1程度)のお茶の葉を入れます。

但し入れるお茶の量は立てた後に茶汁の濃淡を見てからまた加減しますと一層程よいお茶が立てられます。

(2) お湯の温度

沸かしたお湯の温度は95℃~100℃(沸騰した時)に達したらすぐ茶瓶の中に注ぎます。沸いたお湯を長く沸騰させてからお湯を立てることは禁物です。こうした場合はお茶に活性がなくなり、美味しく立てることが出来ません。

(3) お茶を立てる時間

第1回注入したお湯は約1分間たってから小茶碗に注ぎ飲用します。(第1回目のお茶を飲まずに捨てる方もありますが、この場合は注入したお湯はすぐ捨てて、次に第2回目のお湯を注入してから飲用します。)

この次に第2回目のお湯を注ぎ焼く1分15秒(1回目1分+15秒)たってから小茶碗に注ぎ飲用します。また次に第3回目のお湯を注ぎ約1分40秒(2回目1分15秒+25秒)たってから小茶碗に注ぎ飲用します。

又その次の第4回目のお湯を注ぎ約2分15秒(3回目1分40秒+35秒)たってから小茶碗に注ぎ飲用します。

こういうふうに、1回ごとに逐次放置時間を延長すれば大体茶汁の濃度は毎度同じくらいになります。

◆ 工夫茶の立て方

1 茶器の準備

茶瓶（急須）小茶碗、茶托、茶船、茶盆、茶則、小匙、湯沸し、茶巾等を準備します。

2 お茶拝見

主人(茶番)はお茶を立てる前に、お茶を茶盆に乗せお客様にお茶のよしあしを見てもらいます。それから今立てるお茶の性質を紹介します。茶番とは客のためにお茶を立てる役のことです。

3 茶瓶温め

茶瓶(急須)の中に前回立てたお茶の味が残っているかもしれないから、今回のお茶を立てる前に、必ず沸騰したお湯で急須を清め温めます。急須を温めるもうひとつの目的は、急須を温めた熱度でお茶の香味の出をよくします。

4 急須に入れる茶の量

急須に入れるお茶の葉の量は、お茶の性質と各自の嗜好や習慣によって加減しますが、凍頂茶を立てるとき、一般の習慣としては150cc容量の急須を使った場合は、容水量の20分の1～15分の1位のお茶、即ち8～10g程度のお茶を入れます。茶缶の中からお茶の葉を取り出すときは、茶則にのせるか、あるいは小匙でとり、そして急須に入れます。直接手で缶の中からお茶の葉を取ることは禁物です。

5 お茶を潤し温める

これは沸騰したお湯を第1回目急須に注ぎ、潤し温めてからその温めた水を茶船に捨て、そして第2回目に注いだお茶を飲む作法です。

但しこの作法は必ずしも行わなくてもよいです。

この目的は乾燥して りのよいお茶に潤いを与え温めて、お茶のよりをほぐし、お茶の香味をたやすく出させるためです。

6 お湯を注ぐ

その次に沸騰したお湯を急須の上約10cmの高さから徐々に急須に注ぎ蓋をします。こうして約1分間浸したらお茶の香味が充分出ます。

7 急須温め

お湯を急須の中に注いだあと、すぐ急須の外側にもお湯を注ぎ、“茶船”の高さの半分程度までお湯を浸します。こうすれば急須の外側からも温度を加えるのでお茶の出が益々よくなります。

8 小茶碗温め

第1回目のお湯を茶船に捨てる前に、小茶碗を茶船の中に入れてお湯で

温めるか或いは別に小茶碗を温めます。この二つの作法がありますが
筆者は後者のほうが衛生的でよいと思います。

9 急須の底部を乾かす

沸騰したお湯を急須に注いで約3分間が過ぎたら、急須を取り上げ、その底部を“茶舟”の内側で廻し、底部の水分を落とすか或いは乾いた茶巾の上で水分を拭うという二つの作法がありますが、筆者は後者のほうが器を痛めず又衛生的でよいと思います。

10 お茶を小茶碗に注ぐ

急須から小茶碗にお茶を注ぐ作法も二つあります。そのひとつは直接小茶碗に注ぐ作法です。これは末端の小茶碗から順序よく始めの小茶碗まで2～3回に分けて注いで各々の小茶碗のお茶の分量と濃さを同じくさせる方法です。もうひとつは茶汁を全部“茶海”に注ぎ茶海を持って各個の小茶碗同じ量に注ぐ方法です。この方法は比較的便利でやりやすいです。

11 お茶を呈上

お茶を注いだ小茶碗を茶托にのせ、年長者から先にお茶を呈上し飲用してもらいます。

そして主人(茶番)は最後の一茶碗を残して飲み、立てたお茶のよしあしを確かめます。この時、主人は速やかに第二回目のお茶を立てます。この方法は第1回目と同じです。第3、第4回も同じ方法でやり、お客様にあまり長く待たせないようにします。

12 片付け

茶のみ会が終わったら、先ず、急須の中の茶殻を茶殻入れに落とします。それから小茶碗、茶舟、茶会等とともにお湯で清浄にしてからもとの位置に直します。

むすび

以上烏龍茶について簡単に申し上げましたがおわかりになられたでしょうか。今日は我国の烏龍茶のすばらしい効用、その特徴、選び方、立て方等について述べさせていただきました。これが皆様様の今後の日常生活に活用されて、この藝術と御健康に益するところがあれば幸甚に存じます。本日はご静聴有難うございました。

(1999.11.21講演より)

公学校高等科第十回生同窓会

蕭 再福

中華民國七十六年（1987年）八月二十三日 日曜日 晴

この日、台中市の西北大飯店に於いて、翁有来君のお世話により埔里公学校高等科第十回卒業生の、卒業五十周年記念同窓会が盛大裡に開かれた。男性十二名（内細君同伴八名）、女性（内亭主同伴三名）、合計三十名の参集の面々は久しぶりの再開に久闊の挨拶に暇がない。「さん」付けがいつの間にか、呼び捨ての昔にかへり、あっちに三・四人、こっちに四・五人談笑の喜びは和やかなものだ。きびしい時代を生き抜いてきた私には、この光景にふと、戦線くらく黄昏れて砲声遠くたえし頃あゝ吾が友よ君も又生きていたかと眼に涙の様な幻想が浮かんでくる。案外、ふさふさと黒髪をただよわしているが、どうも色艶が稍不自然である。よく観察するとそれは加工されたヘアであることに気がつく。無理もないことである。この世に生まれきて、皆すでに六十五・六年の歳月を経てきたのだ。

それぞれ歳に相応しく、オヂイサン、オバアサンになりすましているのだから不思議な事ではない。天然色の髪を保持している私には些か貫禄の引け目を感じる。退却型の禿ぶりが侘しい。私たちのメンバーは、埔里、烏牛欄、史港、溪南の各公学校本科六年の課程を修了した者の集まりにして、男性三十一人、女性九人の当時としては珍しい男女共学の高等科二年の課程を共に学び、共に遊びし間柄である。今すでに男性八名、女性二名の物故者になりましたる事は洵に哀惜の極みである。合掌! 黙禱! 就中、黄耀堂（西部ニューギニアs19.9.12戦死）、陳金城の両君が南方戦線に於いて軍属として散華したことは痛恨の至り、身につまされる思いがして胸がつまってくる。さぞや、苦難言語を絶する戦場で辛かっただろう、腹も空いただろう、後顧の憂いも多々あったろうに、全く痛惜に堪えない。白炳壙君は、靖国神社に祀られているが、ちゃんと武運めでたく終戦後に、中国の少佐殿として復員している。（中略）

すぎ去った半世紀と云う歳月は、少年から青年への私たちの身の上に、それぞれ異なった苦難と喜びを与えてくれた。その喜怒哀楽の道程の中に、私たちは成長し、今老境に入りつつあるが、集った一人、一人の面持は、皆、満ち足りた面相している。人生の黄昏路を長閑に漫歩している幸福者の一群と言えよう。今日のこのささやかな集いは幸せな人生のひとつまであるのだ。この様な会合が果たして世間にどの位あるだろう、今後又何度恵まれるだろうかと、ふと思いをめぐらす。いろんな事が次から次へと追憶されてくる。老化の現象である。そもそも、私たちの同級会の由来は、昭和十二年（1937）三月十六日（だったと思う）の卒業の日に、別れを

惜しみつつ北公学校の校門迄お送り下さった恩師廣江先生が別れ際に「ではみなさん、同級会をどうきめましょうか。毎年の何時頃がよろしいでしょうか?」との問いに対して、私たちはもう明日からは登校できない、こんなチビで社会人になる不安だろうか、又は旧友たちとの別離に稚ない胸が痛んだのか、今となってはさだかに思い出せないが、おそらくはこんな複雑な気持だっただろう。柱の低い校門に、卒業証書を手にして無言のままの私たちに先生は言葉を継ぎ足して「ぢや、毎年の正月三日にしましょうか」との一言が、間断的ではあったが、この会が消えることなく今日までに続いてきました。あの日の先生の黒色文官服の瀟洒なお姿や、級友諸々の沈んだ顔つきは今でもはっきり甦らすことができる。あの時分の私たちは本当にいじらしい連中ばかりだった。卒業式場に歌を唄い乍ら感極まって、シク、シク、ハラ、ハラとおさな涙を流す風情は可憐にして人情味豊かなものだ。

今時代の子に、こんなにも豊かな人情を抱いている者は居るだろうか。吾が家の愚息、愚娘などは、幼稚園から大学までの間に於ける卒業の日に、敷居をまたいだとたんには必ず「どうか! 今日の卒業式に涙の一滴か、二滴ぐらい流したか」と問う私を怪訝な眼で見返して「どうして卒業式に涙を流さねばいけないの、おかしいね、パパは」と反問してくる始末。もう幾度ぐらいになるだろうか。隣近所や知人の子にもその都度問いかけるが、すべて似たり寄つたりの返答ばかり、こうなってくると、「三人市虎をなす」の態になり、こっちの考え方がおかしいみたい、時代遅れの野暮爺々だと見なされているかも知れない。が、さにあらずこれは教育のあり方と世相の変遷の然らしむる所以だと思う。

因みに今、忘却の彼方から嘗ての諸先生方（内台人を問わず）の教育者としての一端を引き出して、今の教職者との軒輊を究めて見よう。時間外の補習（おもに受験準備）などはプリントから紙代まで先生が自腹を切り、生徒には負担はかけなかった。又、一銭五厘たりとも報酬、今で云う補修費を取りませんでした。すべての言行は四書・五経に基づいた精神で己の天職を全うして下さいました。これは老いてきた今に思い知ることである。当節、周辺の有様はどうか。昔の先生方の爪の垢でも煎じて飲ませたいといつも思う。

『放於利而行多怨』とは孔子様のお言葉であるが耳に痛いお詞である。実際、今のは憎らしい程がめつい。あまりにも功利的に走っている事は津々浦々にご周知のとおりである。希有に例外もあろう。人間の生存上先立つものはお金なり、には間違いはないけれど狡猾な考えの下に教へ子に接していたら、将来これ等児童が大きくなった暁に、どう感じとるだろうか。思っただけでもぞつとして、世間が寂しくなる。これぢや豊かな人情味ある人間に育てて頂くと願うは、木によりて魚を求めるが

如きであろう。卒業式に涙の一滴でも流しなさいと期待をかけるなんて、野暮の骨頂だと反省させられる。けれどもこれは焼きなおさないとならないようだ。

今、手許にある第一回から第五回までの同級会記念写真からあれこれたぐってみよう。

第一回は昭和13年1月3日 母校講堂で、どなたが撮ったのか、4cm×5.5cmの色あせた写真は拡大鏡によらないと見分けがつかない。女性の参加者なし。一番前列に、鼻たれ小僧みたいな、高順来、余再昭、蔡洲煌、童四農、白炳壙が構えている。最後列の高台に、施丁坤、私、潘阿雲、鄭傳富、総員二十名。 どうしたことか先生が入っていない。この写真は先生がとったらしい。

第二回は昭和14年1月3日同じ講堂で、廣江先生ご出席の下に男性二十二名、女性七名。第三回は昭和15年1月3日同じ講堂で、和田先生ご出席の下に男性十八名、女性四名。第四回は昭和16年1月3日日新亭と云うソバ屋で、廣江先生、和田先生おそろいのご出席を仰ぎ男性だけが十六名、今回以降は女性の出席皆無。理由は不明、どうもこの頃から女性のお嬢さんたちは男性より成長か一段と進み、はなたれ小僧たちとの寄り集まりに興味がなくなったみたいと、ふり返って斯く想像される。

第五回は母校講堂で、本科甲・乙組併せての総合クラス会、昭和17年1月3日廣江先生ご出席の下に二十三名、内高等科出身十一名、女性なし。この年(s17)の七月中旬から私は一兵卒としての運命を辿り、遠くシンガポールから復員したのでこの間は、おそらく時局の関係やら、各自の成長にともなう生業の負担やらでチリチリバラバラになってしまい、かつ加えて終戦後の苦難時代に音信不通がままに途絶えてしまった様である。

幸いにして昭和三十七年(1962)の二月頃だったろうか、大先輩である故黄万益氏のご尽力に依り、戦後初めて日本から廣江先生をお迎え致し、奇跡的に先生との二十年ぶりの再会は、始終喜びと感激を満喫することができました。この絶好の会合は絶えて久しきにわたる同級会復活の端緒になり、爾後、年に一度の級友再開の喜びをもたらしてくれました。ところが度重なる毎に席上に先生が一人もお見えになっていないのに、一抹の寂しさと物足りなさをみんなが感じ、一九七四年に、それでは廣江先生と和田先生をこちらにお招きしようとの決議で促進しましたけれども、結局は、和田先生お一人だけがお見えになりました。この時点にはもう皆はずでに五十路に上り、初老の兆しを仄めかしている年輩でしたが、先生を前にいただくと、知らず知らずの中に、稚心に還り、四方山話や、思い出話を語るひとときはこよなく愉しかった。白髪のはまだ居なかった様だ。みんな元気澆刺として頼母しい寄り集まりだった。これも何時しか十数年前の故事物語になってしまった。

唯々去り逝く歳月の何と早きことに懐旧の情をかきたてられるのはあながち私だけではあるまい。確か、今次の和田先生の歓迎会だったと思う。来年の同級会の世話人をG君にお願いする事に話が出て、ご本人の承諾を得たのだが、歳明けてもなしのつづて、待てど暮らせど一向に音沙汰なく、ウヤムヤの中に何年か過ぎてしまった。

これより六年の光陰が過ぎ、則ち民国六十九年(1980)の某月にたまたま故林耀輝君の告別式に参加した。数名の者は、級友の不幸に、鉄砲玉の弾着を身近に感じたのか、同級会を復活させねばお互い再会の機縁がうすれて行くばかりだ。こう共通した感慨の下に、蘇永仁君等十二名が発起人となり、本科第三十三回甲・乙・丙組と高等科第十回の聯合同窓会を開く事に意見の一致を得て、直ちに、許洲煌、徐万鎮両君に連絡の手配を煩わし、翌民国七十年(1981)三月十五日に、埔里大飯店に於いて盛大に開かれた。今は故人になられた黄○塘(火偏に木)先生や、苗栗方面からも林錦福先生がご出席下さり、男女合わせて八十余名の盛会は二度とないだろう。本科の組で、四十年ぶりに再会する者がかなりあり、名前を名乗り上げられて、「うん、似ている、似ている」と頷いてる。丙組のお嬢さん連中はさっぱり覚えがなく、紹介されてもおぼろげな記憶さえ浮かばない。ましてや、きらびやかに装ったお姿ちや猶更のこと。今次の聯合クラス会の散会後に、高等科の者だけがコーヒーショップに集まり、夜更けまで談笑を続けた。その折りに、又G君に、まだ果たしていない同級会の世話を促し、彼の肯定を得て、来年の楽しみとして各自夜道の帰路について。けれどもこれは又して「黄牛」になってしまった。再び佳報を待ちわびる事又数年、こう再度の断層の記録になった事は、かへすがへすも甚だ遺憾千万であった。

假に、これを論語の尾生高にまつわる逢い引きの物語に当てはめて思うなら、吾等級友一同はもうとうに、土左衛門似なり果てているだろう。あっちこっちから目標外れの許洲煌君に問い合わせるが、埒のあくことではなかった。

斯様にして途絶えてしまった同級会をつなぎ合せてくれたのが三年前(1985)在台中市の七名の方の発起により、同年七月二十八日に阿美姉の家で開かれ、続いて翌一九八六年八月三十一日には級長であった呉信水君の世話で烏牛欄にある立派な邸宅で催し、そして今夏は台中市で約九時間にわたる盛会までに演変してきた。翁君の御家族の皆様、奥さんや嫁さん、お嬢さんお揃いでのご接待は感激と感謝の二重奏、痛快この上なし。名残の余韻が翌日まで続き、十一名の者が、阿美姉のご招待にあづかりカラオケディスクに集まって唄いまくった傑作はみなさん方は一生忘れられないだろう。これからも間断する事なく、

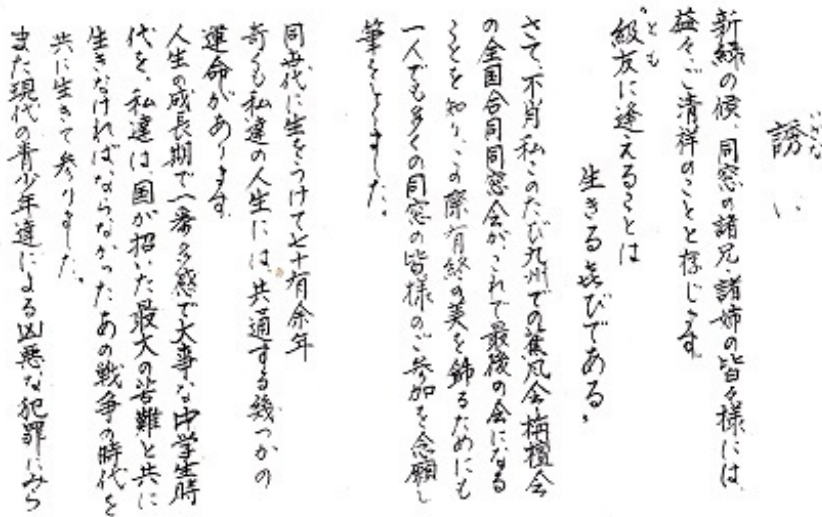
綿々として同級会が続けられますよう、切に願うばかりだ。そして
吾等の友情をよりよく永く温めてゆきたい。

つくづく思うに、吾人はすでに人生の黄昏路を歩み行く一群である。この歳にもなれば人生の禍福は宿命的に形成されてしまったものと考えられる。人の親として尽くすべき責務は滞ることなく皆が尽くしてしまった現今に於いて又、なにをか求めん。今更緊禪一番、立身出世を夢見る人は居るだろうか。唯々家庭平安と、健康なる躯体を願い念ずるほかにいづれの望みがあろうか。こう思いを致した時しみじみと年に一度の元気な顔合わせは貴重なものにして、ありがたいめぐり合せだと身に染みてくる。たとえ、各自が境遇を異にしている、昔より「貧賤の交わり忘るるべからず」とあるように、吾等の交わりは、殊更に見栄を張る事とか、ええ恰好をつける必要はないと思う。吾等は青梅竹馬のクラスメートであるのだ。表を見せ、裏を見せて散る紅葉の気概で残りし人生（ボクはあと二十六年のつもりだけど）を、足・腰ともに強く、たのしく生き抜こうぢやないですか。先づ健康第一で行こう。

終わりに、総ての恩師のご健康と『福如東海、寿比南山』をお祈り申し上げまして、諸兄、諸姉との又の再会を楽しみにしつゝ擱筆する。

1987年9月9日（重陽節）

今、手元に昨年(平成)14年9月、佐賀県呼子町で開かれた薫風会(台中第二中学校同窓会)と梅檀会(台中第一高等女学校)の「合同同窓会のしおり」があります。その中に、達筆の毛筆で書かれた同窓会参加を呼びかける文章と参加してくれた会員に対するお礼の文章に目が釘付けになりました。芸術的とも言える字体とともに行間には「台湾がふるさと」との思いがあふれ、読む人々の郷愁をかきたて筆者の熱烈たる心情が伝わってくるのです。参加を呼びかけるタイトルは「誘い」(いざない)となっておりました。なんと高尚な表現でしょう。普通は「さそい」と読みますが、「いざない」は文学的表現なのです。このようなもう一つの読み方があることを知っている(読める)若者は果たしているでしょうか。美しい日本語がだんだん消え、日本語は乱れているといわれています。そんな中であって、このような美しい日本語で、かつ人々に切々と参加を呼びかける文章に共鳴し、遠く海外(台湾)からの仲間(同窓生)も参加し、例年を越える多くの人たちが集まったそうです。まさに「文は力なり」です。筆者は御礼の言葉の冒頭で「朋あり遠方より来たる、また楽しからずや」と孔子の言葉を引用して喜びの表現を表していました。それでは、以下原文のまま同窓会のしおりから抜粋したものを紹介します。ゆっくりご覧になってください。



新緑の候、同窓の諸兄諸姉の皆さまには益々ご清祥のことと存じます。

級友(とも)に逢えることは 生きる喜びである

さて、不肖私このたび九州での薫風会、梅檀会の全国合同同窓会がこれにて最後の会になることを知り、この際終美を飾るためにも、一人でも多くの同窓の皆様のご参加を念願し、筆をとりました。

同世代に一生をうけて七十有余年。奇しくも私達の人生には共通する幾つかの運命があります。

人生の成長期で一番多感で大事な中学生時代を、私達は国が招いた最大の苦難と共に

生きなければならなかったあの戦争の時代を共に生きてまいりました。

また現代の青少年達による凶悪な、犯罪にみられるように自分さえよければ-----という

個人主義の風潮や自分の欲望だけを追求していく生き方とは全然異なり、己を犠牲にして、

国の為他人の為に生きることを常に幼な心に強く教えられて育ちました。

欲しがりません勝つまでは----- 'を合言葉に耐え忍びながら、勝利を固く信じていた私達

にとつてあの終戦で、全てのものを失い、哀惜と無念の情けを:抱きながらの引き揚げ、そして未知なる内地でも無からの出発、激変激動の渦中の必死で生きてきた若節の才月があります。私達が育つたあの時代は日本古来の武士道の影響が強く、男尊女卑の考え方もあり男女七歳にして席を同じうすること勿れ----そんな掟?があつて常に男女は隔たりを保つことで男女共学を拒み、男は強い頼もしい男らしい男に、女は女らしい大和撫子となることを主眼に教育された軍国の時代でもありました。

時の流れが歴史を変えました。あの厳しい戒律が解けて、やっと席を同じうすることのできる平和な時代となり暫く遅い遅い春-----老昏が訪れました。ここまで辿り着くのに余りにも遅い長い長い道程でした。

私達が今なお共有しているものに 台湾への強い郷愁があります
南国特有の紺碧の空のもと灼熱の太陽を共有して幸せ一杯に育つた幼少の日々
私達だけが知っている台湾での生活
私達だけがお互:に理解し合えるもめ…
私達だけが持っている誇り…
そんな連帯感と絆を感じます。

あの若節の頃、いつも私達に生きる勇気と自信そして活力を与えてくれた今なお大きく光り輝い:ている夫々の母校(二中、高女)の灯のあることを忘れず限るある残りの人生を幸せだった幼き日の思い出に浸り共に語り、共に歌い、余生の活としよう。

我が人生に悔なし

台中二中 20回生 芽生 和之

平成14年5月吉日

(以下はお礼の手紙の冒頭のあいさつ)

御礼のこころは

〆朋あり遠方より来たる

また楽しからずや (孔子)

皆さん、お久しぶりです。

本日はご繁忙中のところ、ご参加下さいまして誠に
ありがとうございます。

厚くお礼申し上げます。

「生きて再び逢える」そんな確信のもてる時代で
はありたいですね。

そんな時代に育った私達だからこそ、何時逢っても
再会はこのよき喜びであり、感無量であります。

台北第三高女 ― ある告別式

前霞山会参与 大倉喜代司

1 長い海外生活の中で、今でも忘れられない一つの事件がある。それは1975年7月31日の夕刻のことだった。台北空港で飛行機が墜落し、日本人も巻き込まれて1名が死亡、1名が再起不能の重傷を負った惨事である。遭難された篠原徳之助さんは、戦前の台北第三高女の教え子達の招待で7月26日に訪台していた。27日夜、先生の71歳の誕生祝いを兼ねた盛大な歓迎会で、教え子達との楽しい一夜を過ごした後、7月29日に台湾南東部の蘭嶼島(注)に飛んだ。篠原先生は植物学が専門で、就中台湾の植物に関しては知る人ぞ知る権威である。教え子に頼まれて同行したのは、旧知の同好の土廖日京博士(台湾大学教授)だった。蘭嶼島では多くの植物標本を採集し、珊瑚礁で珊瑚と貝殻を拾ったという。7月31日に同島を出発して台東で遠東航空のバイカウント機に乗り換え、花蓮経由台北に向かった。

折悪しくその日は天候悪化のため、台北空港付近は篠つく豪雨で視界不良となった。機長は着陸寸前に再上昇を試みたが、時すでに遅く機は滑走路を外れ、右翼から地面に激突、機体は大破して三つに分断されて飛び散った。事故発生は午後4時。地上に激突の瞬間、廖教授は人事不省に陥ったが、気がつくやうに篠原先生は廖教授に覆い被さるような姿勢で、すでに事切れていたという。事故の被害者は死亡27名、重傷者48名の大惨事で、生存者がいたことが不思議と言えた。直ちに救出活動が展開され、負傷者は急遽市内の各病院に分散して搬送された。

その日の6時頃、退勤時間も過ぎそろそろ帰宅しようかという時間帯であった。突然中年の女性3名が血相を変えて筆者の部屋に飛び込んで来た。「飛行機がおちた」「先生が乗っているんです」「どこにも先生がいません」と口々に喚く。それがこの事故に我々が引き込まれた発端である。オバさん達を落ち着かせて聞いてみると、この人達は戦前の台北第三高女の卒業生で、蔡挿華さん、林彩雲さん、徐網嬌さんだった。彼女達の話をつなぎ合わせると、彼女達(第三高女21期生同窓会、昭和19年卒)が日本から招待した恩師の篠原先生が遭難し、空軍病院に運ばれたとの空港からの急報で、空軍病院に駆け付けたが収容者の中にはいなかった。それではと中心診所、台湾大学病院、三軍総病院にも回ってみたが、どこも地獄図絵の凄まじさだが先生は見当たらない。万策尽きて交流協会に相談に飛び込んだというわけだ。

事情は大体分かったが、台湾療養院にも収容者があるとのニュースを聞き、早速日本人職員(八代主任)と産経の住田記者が確認に向かったが、やはりそこにも居なかった。そうこうする中に、台湾観光協会の雷樹水さんから、すでに死亡した者は、もう市立殯儀館(葬祭場)に送られたとの電話が入った。考えたくはないが、念の為確認すべく3人の教え子連れて殯儀館に向かった。殯儀館の中には既に遺骸が溢れていた。運搬用のワゴンの上に乗せられたままの死体もあれば、室内に収め切れず、河岸のマグロのように廊下に並べられている死体もある。身元確認が済むまで

は処分はできないが、台湾の夏は蒸し暑いので腐敗も早い。冷房がないため遺骸は大きな氷の上に寝かされ、体の上にも氷が乗せられていた。暑さで溶け始めた氷水で床が濡れ、すでに異様な悪臭を放っている。ふと傍を見ると一緒に来た筈の若い台湾人職員の姿が見えない(あとで聞くと、宗教上の理由から死体を見てはいけないのだと弁解していた。肝腎な時にはいつも要領よく逃げ出す男だった)。一人一人の顔を間近で確認して歩くのは辛かった。事故の激しさを物語る酷い傷跡と褪色した血の色は見るに忍びないが、役目柄仕方がない。結局、篠原先生は一番奥の部屋に横たわっていた。

合掌。

余談だが、その夜帰宅して遅い夕飯を食べようとしたら、ビフテキが出てきた。いやでも無惨な遺体を思い出し、こんな時にとお手伝いさんを叱ったことを覚えている。篠原先生の死が最終的に確認されたあとの彼女達の悲しみようは見るのも辛い程で、「私達が先生を呼んだばかりに、こんなことになった」と自責の念に苛まれていた。驚いたのはその後の事後処理ぶりで、彼女達の能力の高さと一糸乱れぬ団結力は流石と思わせた。急を聞いて訪台した息子さん達の世話から、殯儀館との打ち合わせ、納棺、告別式の準備、火葬、骨上げ等々、到底日本人女性には真似のできない見事な手際だった。後で聞いたところでは、篠原先生が予約しておいた台北のホテルの料金も、彼女らの交渉で快く返金してくれたそうである。

2. 告別式は彼女達のアレンジにより、8月3日市立殯儀館の斎場でしめやかに執り行われた。それは冒頭にも述べたが、筆者がこれまで参列した数多くの葬儀の中で、終生忘れることのできない感銘深いものとなった。

その日は天もまたこの悲劇を悼むかのような風雨の強い日で、台風警報が発せられていた。祭壇の篠原先生の遺影の両側は、並び切れない程の花輪、花籃で飾られ、遺族席には2人のご子息のほか、娘代わりとして徐網嬌さん、林彩雲さんが立っていた。来賓席には交流協会の卜部所長以下の職員、豊田通商の会田支店長、偶々台北に滞在されていた朝日新聞OBの佐藤哲男氏等が出席したが、日本人の数は疎らだった。寧ろ台湾の方々の姿が多く、教え子達のご主人方も多数参列されていた。

受付係の2人は徐網嬌さんのお嬢さんだった。式は黄玉嬌さん(先輩)の司会で始まり、同窓会会長楊先生の弔辞に続き、21期生代表として蔡○華さんが弔辞を読み上げた。あの飛び込んで来た蔡さんである。その切々たる語りかけに耳を傾けているうち、不覚にも涙が瞼に滲んできた。詳しく説明するより先ずその全文(原文のまま)を紹介した方がよいだろう。

「篠原先生！

先生が急逝されたことは、私には悪夢としか思えません。いえ、夢でなければならぬのです。1967年5月、終戦後先生が再びおいで下さった時の感激----。20数年の月日を隔てても、先生の学問に対する情熱は、ちっとも変わることなく、またその後数回おいで下さった度毎に、フラワーデザインの講習、現在の日本の学生と台湾の学生家庭との生活様式の交流、或は熱帯

植物の採集と、いつも違ったアイデアをお持ちで、私達は只々感心するばかりでした。

先生！

第三高女時代の先生は、学課には非常に厳しく、私達にとっては寧ろ恐ろしい先生だと思われましたが、扶桑会誌に「花の表情」という随筆を挿絵入りで書かれ、その中に、西洋のお嫁さんはバラの花を頭に飾るが、台湾ではどうだろう。ナツの花は散りやすいし、金蕉の花は重すぎるから---と台湾語入りで書かれてあったのに、私は全然別の先生の半面を見出して、びっくりしました。当時台湾語は禁じられていたのに、先生は堂々とそれを書かれたからです。

先生！

先生は筆まめなお方で、差し上げた手紙には必ずすぐお返事を下さいました。ユーモラスな内容で「貴女達に逢っているのが一番楽しいです。こんな顔ですから楽しそうな顔をしてはいませんが、心の中では結構楽しいです。貴女達はすでに50歳近くにもなり、孫もある人があるが、全くそんな気はせず、嫁にやった自分の娘達のオシャレを聞いていると、何となく心が安らぎます。うるさい娘達と一緒に居るのは楽しいことです。30年も年が若返ります。私だけがヨボヨボの痩せて皺の深い老人の醜さをさらしてしまったようですが---」と書かれてあり、台湾餅のお礼状には「懐かしい第二の故郷の南国の味を感じて頂いています」とあり、どのお手紙にも本当に娘に対する父親の愛情が溢れていました。今度いらっしゃる前にも、「台湾の植物図鑑その他参考書10冊以上求めてきました。そちらの国語の名称も調べて見ました。蘭嶼島と貴女の面白い話を楽しみにしています」と学究へのファイトを示されると共に、私達にはやさしい先生でもありました。

先生！

7月26日の夜、私達は大喜びで、空港で先生をお迎えしました。27日の盛大なお誕生日のパーティーにも、県内の輸出向きのスカーフだからと、全員にプレゼントして下さいました。それがよもや先生の形見になろうとは誰が想像し得たことでしょうか。28日、私は先生を淡水のサント・ドミンゴ城にご案内しましたが、その途中の海岸でヒルギの木を見つけられ、「これは昔教えなかったが、塩水に強い珍しい植物だ。公害には強くないから、保護する処置を考えなければいけない」と、田んぼ道をスタスタと歩いて話されながら採集なさいました。何時でも学問にご熱心な先生には教えられることばかりでした。

先生！

いま親のない私は、先生を親と思って遠慮なくいろいろとお話しもし、蘭嶼島からお帰りになられたら---と楽しみにして、スケジュールもいっぱい立ててありましたのに---。先生は「娘達が良くしてくれるので嬉しい。台湾で死んでも本望だ」と何時かおっしゃいました。どうしてそんなことをおっしゃるのかと私達は怒りましたが、こんな悲しい結果になってしまいました。

先生！

なぜ今までのように勇気を奮い起こして、元気になって下さらなかったのです。残念です。生徒として、娘として、最後まで至らなかった私達をお許し下さい。この悲しみは永遠に消えません。

先生！

先生は私達から離れてしまわれましたが、先生のお心は、いついつまでも私達の心の中に生き続けることでしょう。そして、今後とも私達をお守り下さい。

先生、篠原先生！

どんな言葉を使っても言い尽くせません。どうぞ安らかに眠り下さい。」

以上が弔辞の全文であるが、活字では読み人の心情が伝わらず、実際の式場の空気も伝わらない。それは通り一遍の葬儀とは全く違う雰囲気、切々と述べる弔辞とともに式場のあちこちからすすり泣きが洩れる中で進行して行った。異国の人が日本人の恩師を偲ぶ日本語の弔辞と偽りのない哀惜の涙、心の準備のなかった日本人列席者には理解し難いような情景だった。その時の感動を佐藤哲男氏は次のように手記で述べておられるので、代弁して頂くことにしたい。

「----(前略)----だが、日本で知人、それも深い縁でもない方の告別式に義理で出る場合のような、少々面倒くさいような気持ちであった。しかし、当日殯儀館に向いて、私は軽薄な自分の態度を心から申し訳なく思った。あれ程真心のこもった素晴らしいお葬式を私は未だかつて見たことがない。(中略) 私の心を最も衝き動かしたのは弔辞であった。中でも蔡挿華さんの代表弔辞は私の胸をえぐった。嗚咽のため途切れがちだったが、その言葉はうちふるえつつ、細く美しい声となって、長文の弔辞であったのに少しも長くは聞こえなかった。「先生」「篠原先生」と呼びかける蔡さんは、去って行く篠原先生と同窓生の間を繋ぎ止めようとしていた。思い掛けなく私は自分の頬が濡れて行くのに気がついた。もう何十年も涙など流したことのない私である。最後の斉唱も溪間の清流の如く清らかで、しめやかだった。篠原先生に霊あるものなら、さぞかし満足されたであろう。本当に先生は幸福な方だと私はしみじみと思ったのである。」

この手記を読んで、自分と同じ感動を受けた日本人が他にも居ることを知った。

告別式はなお続き、21期生の子女を代表して王静吟という娘さんが弔辞を読んだ。日本語のできない彼女だけは中国語だったが、自発的に弔辞を読みたいと申し出たそうで、母親を通じて娘にも第三高女の教育が伝承されていることを実感させる立派な内容だった。式の進行はこの弔辞を唯一の例外として、すべて日本語で行われた。日本語の「仰げば尊し」、「螢の光」をこの時ほどしみじみ聞いたことはない。最後に教え子全員が女学生のように美しい声で、「師の君の御霊よ、此処に降りまして我等の捧ぐる誠受けてよ----」と永別の斉唱をして、涙とともに式は終わった。

筆者はしばし席に留まり、これは一体なんだろうと自問していた。多くの教え子が曾ての恩師の死を心から悼み、嘆き悲しんでいる。而も相手は外国人の教師である。教師と学生の関係がすっかり冷えきった現在の日本では、もう過去のものとなったような情景である。亡くなられた先生がたぐい稀な教師で、すべての生徒から慕われていたからだろうか。どうもそれだけではなさそうだ。第三高女21期生達は、多くの先生方と今でも家族ぐるみで交際しており、多くの先生方が台湾に招待されていることからみて、篠原先生だけが特別とは思えない。

ついでながら、遠東航空会社の事故後の対応はお粗末で、責任者が誰かもよく分からない始末だった。日本なら先ず社長が遺族の前で盆の窪まで見せて謝罪するのが普通だが、一番先に駆けつけるべきこの告別式にも、最後の焼香の頃になってやっと代表者がやって来る程度である。海外で航空事故に遭ったら、国内のような対応は到底期待できない。その後の遺族補償、生存者補償交渉では、一転してタフな相手だった。

3 ところで、第三高女というのは、一体どんな女学校だったのだろうか。統治者たる台湾総督府の当時の教育政策は、台湾人にも広く教育の機会を与えるものだったが、現実には差別があったことは否めない。台湾人児童のために小学校に代わる公学校を作ったのは、本来日本語の不自由な学童のためとすれば差別とは言えないだろうが、高等教育は師範や医学、農学等にしばられ、将来直接行政に関係する法律、政治系は制限されていた。日本でも台湾出身の医者が多いのはこうした背景からだ。当時の台北には女学校が三校あった。

第一、第二高女は本来日本人子女のためのもので、ごく例外的に台湾人生徒を入れるだけだった。だが、第三高女は台湾人のためのもので、全島から選び抜かれた優秀な生徒が集まり、台湾人令嬢達にとっては憧れの学び舎だった。今でも第三高女の出身者は、政治、社会、教育、芸術等の分野で重きを成しており、政府要人や財界の大立て者の夫人として活躍している人が多い。同校は1897年(明治30年)、台湾総督府国語学校第一付属学校「女子分教場」として設立され、1922年台北州立第三高等女学校と改称された。当時の写真を見ると、信じられない程堂々とした三階建ての校舎である。終戦後の1945年には、日本の手を離れて省立台北第二女子中学と校名が変わり、当然ながら日本語での教育は消滅した。現在では台北市立中山女子中学となっているが、一貫して評価の高いエリート校で、誇り高き往年の第三高女の伝統は脈々と継承されている。

初めてこの人達と会った時には、正直なところ戸惑いを感じた。日本人ではないのにひどく日本的なのだ。同窓生の結びつきが羨ましい程強くて、彼女達同士で話す言葉は日本語である。国語(北京語)でもなく、家庭で日常話している台湾語でもない。日本語でなければ、懐かしい女学生時代の思い出に回帰することができないとでも思っているのだろうか。それとも同窓生の顔を見ると、自然に日本語が口をついて出るのだろうか。彼女達の多くは、卒業後さらに上級学校に進学したり、留学したりしている。なのに何故今も第三高女なのか。おそらく教師に恵まれ、校風も素晴らしかったのだろう。彼女達の話に登場する先生達は、人間味に溢れ、理想に燃えた教師像に昇華されている。政府の方針がどうであれ、現場の教師達は情熱をもって台湾人の教育に当たったようだ。

だから、スパルタ教育でビンタを見舞った先生も、いまだに生徒から慕われている。「ビンタを受ける時には、ぐっと奥歯を噛み締めて、ビンタと同時に心の中でエイッと気合いを入れれば平気です」などという言葉が、この優しいレディー達の口から出るのも妙な気持ちである。彼女達は日本人として厳しく躰られた。戦時中だから勤労奉仕や軍事訓練があったが、情操教育もしっ

かり受けた。女性としてのお作法はもとより、生け花や裁縫も習ったし、正月には”かるた取り”もした。時には和服でお澄ましする夢多き乙女達だった。その意味では戦時下の内地の娘達よりも恵まれた日本教育を受けていたと言えるのかもしれない。こうして教育された第三高女の卒業生は、いずれも良妻賢母の典型であるが、それぞれが個性的でもある。あの日飛び込んで来たおばさん達も、蔡さんはちよっぴりおきゃんな行動派だが、徐さん、林さんはおっとりした慎重派である。話す調子も片やシャキシャキ、片や山の手の奥様風とまるで違う。彼女達の日本語は、古きよき時代の古典的標準語で、文章は旧仮名遣いだから、日本の現状からは何となくずれを感じる。それが気に入らないようで「今の日本語は一体なんでしょうねえ」と若者の言葉の乱れを嘆く。

第三高女の中でも、彼女達は”花の21期生”と呼ばれる才媛達だが、同窓会の文集までが全部日本語で書かれている。日本語で書くことが少しも苦痛でなく、寧ろ中国語で書くより易しいのだろう。日本の女子高生に見せたいような見事な文章である。

仰ぎ見る蒼れいや高きわが母校
姿かわれどなほ懐かしや

夜な夜なに目覚めし我は亡き吾娘の
笑顔しのびて涙あふるる

あと二分待たず行きたる乙女ごの
その未来までわびしみており

これらも彼女達の最近の作である。よき時代の日本的教養と精神構造がなせる短歌と言えよう。告別式の見事な日本語の斉唱には正直驚かされたが、彼女達の愛唱歌もまた昔を引きずっている。聞けば好きな歌は「荒城の月」「浜辺の歌」「からたちの花」であり、「花」「宵待草」「初恋」「椰子の実」「さくら貝の歌」「夏は来ぬ」であり、童謡も「カナリヤ」「花嫁人形」「赤とんぼ」「叱られて」と、我々ですらもう遠くなった世界へ無限に広がっていく。「今日のおよき日は大君の」(天長節)や「雲に聳ゆる高千穂の」(紀元節)などを、彼女達のように今も歌える日本人が果たして何人いるのだろうか。この可愛いおばさん達は、もう日本と縁が切れて数十年、よくも若き日々のくさぐさを忘れないものと感心しないではおれない。

曾て同じように日本帝国の支配を受けた台湾と朝鮮半島であるが、一般論として両地における対日感情は相当に違う。その理由として、台湾統治者と朝鮮統治者の経験の差や在留日本人の資質、人柄の違いを挙げる者がいる一方で、被統治者側の民族性の差異を強調する者もいる。それぞれが一面の真理であろう。だが、台湾統治の日本人が産業振興、環境衛生の整備、教育普及の面で極めて有能であったとしても、温情的、人道的であったと自負するのは、統治者側の傲慢な論理である。如何によかれと思って民生向上に励んだつもりでも、被統治者側の目には、鬱陶しく欺瞞的なものとして映るに違いない。終戦直後の台湾で、日本統治の呪縛を解かれた民衆が無上の解放感を味わい、これから自分達の世界が来ると歓喜したのは、紛れもない事実であ

る(尤も犬の日本人が去って、すぐに豚の中国人が来る事態になろうとは夢にも思わなかつたろうが)

日本語教育にしても、台湾人も朝鮮人も統治時代は同じように強制された筈だが、戦後の対応は全く異なるものがある。韓国では政府の方針で日本語を話すことが憚られる(プライベートな場は別として)のに、台湾では民衆がおおっぴらで話す。外省人が天下を掌握していた蔣王朝時代は、日本文化を忌避し、日本映画も輸入禁止であったが、したたかな台湾人はこっそり映画やビデオを密輸して金儲けに利用していた。需要は幾らでもあるのだ。紅白歌合戦のビデオも、翌日にはちやっかりと闇喫茶で上映され、多くの台湾人が息を凝らして見ていた。本省人の李登輝總統の時代になると、それが一層おおっぴらになった。李總統自身も、日本人の賓客とは通訳を使わずに流暢な日本語で話す。

台湾の日本語世代の人々は、日本人と見れば当然の如くに日本語になる。彼等との宴会ではすべて日本語だから気が楽である。昔話になれば「修身」が出てきたり、「二宮金次郎」や「葉隠れ」も登場する。酒が廻ると「よし、今日は天皇の名前を暗誦しようや」「よし、やろう」となり、「神武、綏靖、安寧、懿徳、孝照----」と暗誦が始まる。列席の日本人は仁徳天皇あたりで詰まってしまうので、「なんだ、だらしない。それでも日本人か」と馬鹿にされる。戦前の台湾人教育は、今では想像もつかぬ程濃縮されたものだったようだ。戦時中は多くの台湾人も帝国軍人として徴兵され、3万人もの名誉の戦死者を出した。恨みつらみや嫌な思い出が当然ある筈だ。だが彼等の日台合同戦友会では、恩讐を越えて軍歌の大合唱となるのではらはらする。良きにつけ悪しきにつけ、彼等の青春は日本時代に繋っているのだ。これらの人達も老いてきた。あと20年もすれば間違いなく絶滅する。この地球上で、日本以外の国(地)にあつて、日本の心を日本語で解する人々が存在するというのは、まことに心強いことである。そんな国を、もし今から地球上のどこかに一つ創り出すとしたら、少なくとも半世紀の歳月と、天文学的に巨額な金が必要となろう。況してや統治者としての強制力のない現在では、100年、いや200年かかってもできない相談かもしれない。そう考えると、すでにその域に達している台湾の人達の存在は貴重であり、大切な友人として扱うべきだろう。「とんでもない。友人ではなく親戚よ」と第三高女のおばさん達なら言うかもしれない。彼女達が自分の娘を日本に留学させたいという願いも、過去の絆と自分の思いを我が子に託す姿に見える。そんな一途な思いのわりに、日本の朝野が断交後の台湾に冷たいというのが、遠くなった日本への鬱屈した不満になっている。

筆者は第三高女の人達としか面識がないのでよく分からないが、こうした傾向は台湾各地にあつた学校の卒業生に共通するウェットさであるようだ。曾て甲子園を沸かせた嘉義農林で知られる嘉義の女子家政学校卒業生の回顧談が台湾紙に載っていた。同校でもやはり戦時中は日本人として勤労奉仕があり、興亜奉公日には日の丸弁当(梅干しだけ)で頑張った軍国乙女だったと寧ろ誇らしげに書いている。敗戦後、自分達の先生が道端で哀れにも物売りをしている姿を見て、思わず師弟抱き合つて泣いたという。皇国史観のもとに尽忠報国教育を受けた台湾人子女が、終戦を境に一変した価値観に茫然自失したことは想像に難くない。さらにその彼女曰く。「戦時中も、日

本人と台湾人の感情は手足のように密接に結ばれていました。今でも同窓生は互いに連絡をとり合っており、この友情は植民地時代の最も美しい思い出として残っています。」と述懐している。日本人恩師を招待するというのは、第三高女に限らず、台湾では都市、農村を問わずどの学校でも見られる流行りの現象のようだ。台北第一高女、第二高女なども大同小異とは思いますが、第三高女とは少し違うような気もする。

戦前の日本語教育を受け、日本人の心情を理解する人達は年々確実に減っている。篠原先生の遭難で知り合ったあの素敵なおばさん達の中にも、すでにこの世を去った人がいる。こうした人がいなくなれば、もう心から日本を懐かしむ人はいなくなってしまう。何とかしてこの人達の日本語と日本への親近感を、次の世代にも伝えて行ってほしいものだ。「昔こんな素敵なおばさん達がいた」と過去形で語らなければならなくなるのは寂しい。台湾を男性天国としか見ない日本人旅行者が多いが、台湾の魅力の一側面が、彼女達や老甲子園球児達のまだ住む台湾であることに気が付く日本人は残念ながら少ない。

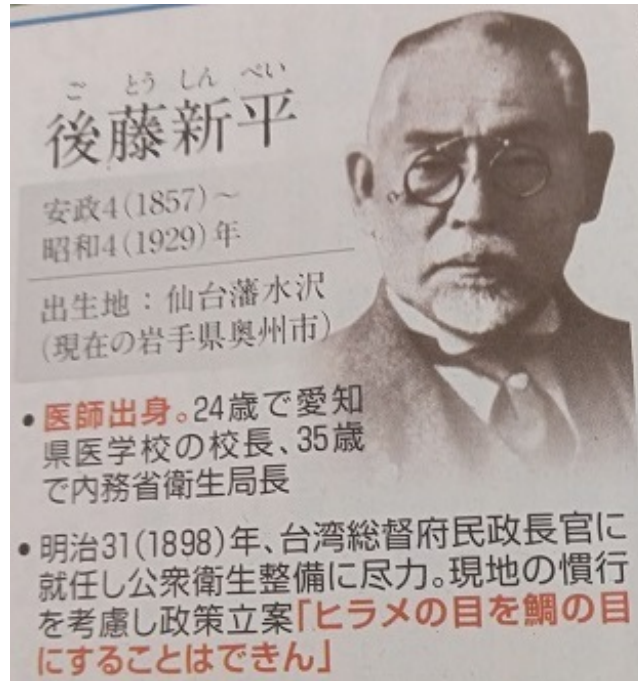
医学者・後藤新平は「生物学の法則」によって台湾の健全な成長を図った。

■ 1. 「台湾独立」の完成 ■

5月20日、台湾の第10代新総統・陳水扁氏の宣誓式典が行われ、12年にわたる任期を終えた李登輝・前総統は陳氏に見送られつつ、静かに総統府を退出した。蒋介石が大陸から台湾に逃げ込んでから約50年。大陸から逃げ込んだ中国人（外省人）が、言語、習俗、歴史も異なる台湾人（内省人）を支配してきた構造は、1987年まで台湾語による放送が禁止されていたことから窺えるように、一種の外来政権支配であった。「台湾独立」とはもともと、蒋介石外来政権からの台湾人の解放を意味していたのである。

李登輝氏が国民党員ながら台湾人として初めて総統に就任し、今回は陳水扁氏が、台湾人の政党を率いて政権を奪取した。ここに「台湾独立」は平和裡に成就し、台湾人による台湾人のための政府が実現した。

戦前、多くの日本人が同胞意識を持って台湾の発展のためにつくしたが、その中でも台湾の「育ての親」とも言うべき総督府民政長官・後藤新平は、立派に成人した息子を見るように、草葉の陰で喜んでいるであろう。



■ 2. 化外、瘴癘の地 ■

日清戦争の結果、台湾は日本に割譲されたものの、そこは清国政府からも「化外（中華文明の及ばない）の地」「瘴癘（しょうらい、風土病）の地」と呼ばれ、見捨てられた荒廃地であった。阿片中毒が蔓延し、原住民による反乱、伝染病の流行が相次ぎ、ほとんど産業らしきものはなく、民生は荒廃していた。日本は当初、武力で治安をもたらそうとしたが、事態は好転せず、住民の中にも日本の統治に対する不安が拡がって、大陸に渡ってしまう者が相次いだ。

日本国内でも台湾放棄論や売却論が主張された。しかし、日清戦争で獲得した遼東半島は、ロシア・フランス・ドイツの三国干渉で返還を余儀なくされ、これら各国が争って進出している。ここで台湾まで失ったら、いよいよ日本は欧米諸国に囲まれて、国の独立すら危うくなる。

明治31(1898)年2月、切り札として第4代台湾総督を命ぜられたのが児玉源太郎であった。児玉はすぐに後藤新平を呼んだ。日清戦争後、後藤が大陸からの帰還兵23万余の検疫を2ヶ月で完了するという世界でも例のない作業をやり遂げた手腕を、当時陸軍次官であった児玉源太郎は高く評価していた。児玉は、検疫事業後、内務省衛生局長となっていた後藤に言った。

「今、台湾をやるのは私と君だよ。ほかにはいない。」

■ 3. 植民地ではない ■

児玉と後藤が台湾に着任したのが、明治31(1898)年3月、時に後藤新平40歳。それから満洲鉄道総裁として転出する明治39(1906)年7月までのわずか8年余に、後藤は民政長官として、阿片問題解決、ゲリラ帰順、港湾・鉄道・道路・下水道建設、土地調査、製糖産業の発展など、矢継ぎ早に近代化政策を実行していった。この時築かれたインフラが、現在も台湾経済を支えている。

台湾を植民地と見る一部の官僚たちに対し、後藤は新しく日本に編入された「新領土」であると主張していた。イギリスやオランダ流の植民地であれば、原材料を買い叩かれ、製品を売りつけられる搾取対象でしかない。「新領土」であれば、米国がメキシコから奪ったテキサスやアリゾナ、カリフォルニアのように、国内領土として治安の確保民生の向上、そして地域経済の発展が課題となる。ただアメリカが「新領土」西南部諸州において、原住民インディアンを殺戮して土地を奪い、不足する労働力は黒人奴隷や中国や日本からの移民でまかなうという「外科手術」的手法をとったのに比べれば、後藤の手法は「漢方薬」的であった。医学を専門とする後藤は「生物学の法則」を方針とした。

ダーウィンの進化論にならい、新領土の社会を一つの生命体として、その悪しき体質は徐々に改善させ、本来の善き生命力を引き出して成長させていくという進め方であった。

■ 4. アヘン専売と吸飲免許 ■

日清戦争後の下関の談判において、清国の全権李鴻章は、アヘンには貴国もきつと手を焼きますぞ、と捨てぜりふを残していったそう。当時16万9千人もいたアヘン中毒患者の問題を日本がどう処理するか、世界各国も注目していた。わが国に伝播したらなんとする。吸引するものは厳罰に処すべし。輸入や販売を行う者についても同様だ。従わないものは台湾から追い出せ。中国大陸に強制送還せよ。このような厳禁説がさかんに唱えられたが、後藤は、これでは各地に反乱が起き、何千人の兵士や警官が犠牲

になるかわからない、と反対して、漸禁説をとった。

まず中毒にかかっているものだけに免許を与え、特許店舗でのみ吸引を認める。新たな吸引者は絶対に認めない。アヘンは政府の専売とし、その収入を台湾における各種衛生事業施設の資金に充当する。

アヘンを政府の専売とするという破天荒なアイデアであったが、後藤の読み通り、大きな混乱もなしに、アヘン中毒患者は次第に漸減して、日本敗戦時には皆無となっていた。

■ 5. ゲリラ帰順 ■

台湾には清国の統治していた時代から「三年小叛、五年大叛」という言葉があった。時の政府に対して3年に一度は小さな反乱が、5年に一度は大きな反乱が起こるという意味である。

しかもこれは一過性ではなく、ゲリラたちは日常的に台湾の村人たちから「税金」と称して、収穫の30%から40%もとっていつてしまう。武力でゲリラを制圧しようにも、日本人には村人とゲリラの区別がつかない。村人が日本の役人に密告すると、ゲリラはすぐに復讐する。後藤は軍政ではなく民政によって台湾を掌握すべしとして、台湾全島に向かって次のような総督布告を出した。

新総督としては、島民の一家団欒を望んでいる。だから帰順したいものは自由に官邸に来てよろしい。もしこれを疑うなら民政長官の側からそちらに出向いて話し合ってもよい。この風変わりな布告は、短期間の間に3百万人の台湾島民に行きわたった。この布告に応じて、三百名あまりのゲリラの一団が投降を申し出てきた。後藤は宣伝のためにも投降式をやろうと決心し、護衛もなく、部下一人だけ連れて、一昼夜をかけてゲリラたちの根拠地に向かった。

投降式の模様は台湾全土に大々的に報道され、その後は安心したゲリラが次々と投降し始めた。後藤は「職を与えなければまたゲリラに戻りかねない」といって、地域の土木工事に従事させるなど、投降後の生活の面倒までみるようにした。

こうして大部分のゲリラが投降し、押収した銃は合計5万丁にのぼった。

最後まで抵抗した少数のゲリラは武力で鎮圧された。ゲリラ対策の完了は明治35年、後藤の赴任から5年近くかかった。

■ 6. 気候・風土に適した農業振興 ■

このようにアヘンやゲリラなどの悪しき体質を徐々に改めつつ、後藤は台湾社会の生命力を引き出すための産業振興に取り組んだ。まず台湾の気候・風土に適した農業を興さねばならない。

そのための人材として元札幌農学校教授・新渡戸稲造に目をつけ、何度も手紙を書き、最後には直接掛け合って台湾に招いた。新渡戸は台湾にはサトウキビの生産が適しているを見抜き、ジャワにまで研究に行つて、品種改良と耕作方法改善に努めた。

この改良品種は瞬く間に台湾全土に普及し、同時に後藤は製糖工場の近代化、大規模化を進めさせた。その結果、砂糖産業は、生産高が明治33(1900)年の3万トンから昭和12年(1937)には100万トンと飛躍的に伸びて台湾の中心産業に発展した。新渡戸はさらにウーロン茶や米の生産も飛躍的に伸ばした。

■ 7. 交通網と都市整備 ■

農業の発展とあわせて、農産物輸送のための築港、鉄道、道路などのインフラ整備が必要となる。これらは人体で言えば筋肉作りに相当する。築港では基隆港の工事を明治32(1899)年から始め、昭和4年には1万トン以上の船舶が同時に15隻も荷役を行うことができる本格的な国際的商業港として完成した。倉庫の規模、能力は当時東洋一といわれた。この基隆港を通じた交易は、台湾に莫大な利益をもたらした。

鉄道は、台湾を南北に縦貫する路線を明治41(1908)年までに全線を完成させた。また当初台湾には道路らしい道路もなかったが、投降したゲリラに仕事を与えるためにも、都市間を結ぶ本格的な道路建設を進めていった。台北市内には高速、並木、一般車道と片道3線からなる幅40メートルの道路4本を建設した。さらに中心部には総督官邸や博物館など、近代的建築物をいくつも建設したので、台北は東京などよりも、よほど近代的な景観を持つに至った。この偉容は現在でも窺うことができる。

また台湾では毎年のように数千名のコレラ患者が発生していたが、後藤は伝染病の予防は上下水道の設置から始まるとして、大規模な上水道と、パリの下水道にならった排水路を付設した。これらの上下水道は東京よりもずっと早く完備したと、台湾の人々は自慢にしていた。

■ 8. 土地調査によるソフト・インフラ整備 ■

バランスのとれた発展のためには、港湾、鉄道、道路などのハードのインフラと同時に、行政、法治などのソフトのインフラも不可欠である。その基礎となるのが、土地所有権保護と課税のベースとなる土地調査である。土地調査は、清国が何度も試みては失敗していた。土地調査をすれば、脱税が出来なくなるので、住民の反乱のもととなっていたのである。

後藤は清国の失敗は台湾に古くから存在する慣習や自治組織を無視して本国の政策を押しつけたからだとして、現地の旧習を重んずる人材を当てて調査を進めさせた。

結局10年以上かかる難事業となったが、その結果、土地から上がる税収は従来の2倍以上となり、十分な成果を上げることができた。

結果を注目していた欧米列強は「日本侮るべからず」との印象を抱いた。

■ 9. 公債による開発資金調達 ■

以上のような開発を行うには、膨大な先行投資が必要だ。イギリスやオランダのように、植民地から手っ取り早く利益を搾り取るというのは根本的に異なる。

児玉と後藤が、開発資金を捻出する方法として考え出したのが、公債発行である。公債を発行して欧米から資金を集め、それによって台湾を開発し、開発利益によってその借金を返すという考え方だ。これは現在の開発銀行と同じアイデアである。

後藤は、6千万円を20年で償還する公債発行計画を組んだ。当時の政府財政規模の8割にも達する巨額の公債発行計画に反対する政治家も多かったが、帰国して反対派と侃々諤々の議論を行い、一部減額した上でついに政府の承認を得た。

この公債によって、世界中から開発資金を集め、産業振興やインフラ整備を進めた結果、台湾の経済は急速に発展し、ついに明治38(1905)年以降、台湾は日本政府からの補助金を受けずに財政的に独立することができた。

■ 10. 真の成功とは？ ■

明治39年、50歳となっていた後藤は、南満洲鉄道株式会社総裁として満洲に赴任し、同様の辣腕を振るうようになる。

これについては稿を改めるが、後藤は台湾のそれ以降の成長について、どのようなビジョンを描いていたのか。

時の首相・西園寺公望が後藤に満鉄総裁就任を依頼した時に、君は台湾で成功した経験を持っている。それをぜひ満洲で生かしてほしい」と言った。後藤は次のように言い返した。それは聞き捨てならない言葉です。台湾はまだ成功していない。成功というのは、財政の独立のことを言うのですが、そんなものは成功でもなんでもありません。台湾の人々が日本と統一する気持ちを持つようになれば初めて成功といえるのであって、今はまだとてもそこまでいっていない。

台湾の人々が経済的自立と政治的自由を得て、その上で日本と一緒にやっ払いこうという主体的な選択をしたならば、それが真の成功である、というのである。

しかし、運命は台湾の人々にこのような選択の機会を与えなかった。大東亜戦争後、今まで台湾とは縁もゆかりもなかった蒋介石が台湾に逃げ込んできて、外来政権として支配するようになったからである。それから半世紀、李登輝、陳水扁両氏の登場により、台湾の人々はようやく自由で主体的な政治的選択を行える立場を得た。

後藤新平を始めとする台湾の発展に尽くした我々の先人たちは、草葉の陰で、かつての同胞の自立を喜ぶとともに、その自由が再び大陸の独裁政権に犯されることのないよう現代の日本人が支援することを願っているであろう。

(あとがきにかえて)

台湾の光

酒川玲奈

私は今台湾の光を浴びています
台湾の光が
あなたに私に降り注ぐ
もし、私があのように輝けたら
しょんぼりしている人を
照らせてあげられるのに

あのまぶしい太陽の中に
何があるのだろう
私は思う
台湾の人たちのやさしい笑顔が
太陽に反射したのだろうと
太陽の光を浴びると
いじめられた人もさみしい人も
みんなみんな
明るくなれる
心がなごむ

だから、私は台湾の光が好き
私は今、台湾の光を体に心に浴びています

(注) この詩は 1992年(平成5年)海外子女文芸作品コンクール入選した詩で、作者は
当時台中日本人学校の小学部6年生でした。

バオダオ台湾

<http://p.booklog.jp/book/130236>

著者：喜早天海

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kisousan/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/130236>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：デザインエッグ株式会社